エデン・クロニクル

トラブルシューター夏凛(♂)

(かりん)

秋月あきら

堕天使の肖像

第1章　夏凛

今夜の帝都は熱帯夜だった。
明かりの消えることのない街の中心にそびえ立つ時計台の針は、零時を過ぎてしまったというのに未だに気温は下がる見込みはない。確かに天気予報では『今夜の帝都は熱帯夜に見舞われ寝苦しい夜になるでしょう』と言っていた。天気予報もたまには当たるらしい。
ビルの間の裏路地は風の流れがある為幾分か涼しかった。だが、今ここにいる男は別の意味で涼しい思いをしている真っ最中だ。
似合わない気品のあるスーツを着た大男の額から汗が垂れる。暑さのせいではない。目の前に〝いる〟一輪の大輪の花のせいだ。
近くで聴こえる終電の走る音が、人間が壁に叩きつけられた音を消してしまった
壁を背にして男は地面にお尻を付き、怯えた表情で目の前に〝いる〟花を見上げた。そこにはビルの合間から零れる月光を背に受けた人物が立っていた。
歳の頃は、十七、八ほど。小柄な身体に黒い生地に白いレー

スをあしらったドレスで身を包み、腰の辺りまで伸びた美しい黒髪が風になびいている。
　そして、なによりも印象的なのは顔であった。白く透き通る雪のような肌を持ち、どこか妖艶さを纏う中性的な美しい顔――。しかし、その人物は〝彼〟だった。
　彼はスーツの男を冷たい眼差しで見下ろしながら言った。
「口割らない場合は殺していいって言われてるんだ」
　彼の声は中性的で涼し気な声だった。
　その声を聞いたスーツの男の喉元から唾を呑み込む音が静かな裏路地に響いた。
「し、知るかんなもん！！」
　男の声は発言内容とは裏腹に震え怯えていた。
「ふ～ん、そっか知らないのか」
　美青年の手が動いたと思った刹那、スーツの男の頬に赤い筋が一本走った。
　スーツの男は声にならない悲鳴を上げた。
「ほんとに知らないの？」
「……知るか！」
　先ほどより男の声からは張りが失われていた。明らかに男は怯えた表情をしている。
　美青年は男の前で腰を屈めて、黒い手袋をはめた自分の指を男の顎に乗せて小さく、そして甘美に囁いた。
「ほんとに知らないの？」
　美青年の顔がスーツの男に近づく。男は一瞬、自分の置かれ

ている立場を忘れ美青年に見とれてしまった。しかし、男は直ぐに我に返り美青年の身体を思いっきり突き飛ばそうとしたのだが……。男が手を伸ばした瞬間、美青年の姿が視界から消えた。

いなかったはずの美青年は闇に同化して男の目の前に立っていた。そして、微笑を浮かべている。

「これが最後のチャンス、ほんとに知らないの？」

美青年の声は夏の空気を一瞬にして〝キン〟と冷やした。

「し、知らねぇ、ホントに知ねぇんだよ」

大量の汗をかき必死に訴える男を前にして美青年が、

「……そっか」

と呟いた瞬間、男の首は地面に転がっていた。

転がる首を見下げる美少年は武器らしいものは何も持っていない。しかし、男の首が刎ねられた瞬間、美少年の左手から何かが突然飛び出し煌いたことを夜空に輝く月と星々は魅ていた。

「知らない場合も殺れって言われてるんだよね」

首を蹴り飛ばした美青年はどこからともなく折りたたみ式ケータイを取り出すと、手首のスナップを利かせケータイを開け、どこかに電話をかけた。

「もしもし真（シン）くん♪」

美少年の声のトーンは明らかに先ほどとは違っていた。別人かと間違えるほどに明るく柔らかな口調をしている。

しばらくの間を置いた後に、電話の向こう側から不機嫌そうな若い男の声が聞こえてきた。

5　トラブルシューター夏凛（♂）

《なんだ、夏凛か、今は忙しいから後にしろ》
「ま、待ってよ真くん。どうせまた妄想してるから忙しいとかって言うんでしょ～」
《……つ、ついにかぼちゃ男爵の魔の手がきゅうり婦人に!?》
真は行き成り意味不明なことを言い出した。夏凛の顔は明らかに相手を小ばかにした冷めた表情をしている。
「真くぅ～ん？」
《……なんだと次回最終回だとぉぉぉ！！》
「……完全にトリップしてるよぉ」
突然電話の向こう側から男のすすり泣く声が聞こえて来た。
「……ど、どうして……こんなことに……ぐすん」
夏凛は目を丸くした。
「ど、どうしたの真くん、何かあったの!?」
《……なんだ、まだ電話切ってなかったのか？》
「はぁ？」
《で、用件は何だ？》
真は一瞬にしてコッチの世界に帰還していた。切り替えが早いので大抵の人はこのノリに付いていけないだろう。しかし、夏凛はいつものことだとすぐに流して気を取り直した。
「え～とねぇ、真くんに教えて貰った人追い詰めて聞いてみたけど、知らないって言ってたよぉ～」
《……なんと、再来週からは新番組『大魔王ハルカ』がはじまるのか!?》
「……ちゃんと私の話聞いてるぅ？」

《聞いている。情報が間違っていたとしても料金は返さないぞ》
「ケチ！！」
美少年は顔を膨らませて顔を赤らめた。その仕草はとても可愛らしく、まさに女の子だった。
《ケチとは失敬な！！　……仕方ない半額にしてやろう》
「いいよ、今度から別の情報屋に仕事頼むよ！」
《ふん、ならばコチラも君には仕事を回してやらんぞ》
「そーゆーこと言うんだ、ふんだ。真くんの端末の中にウィルス送ってやる！」
《私にネットの世界で刃向かうとは死を意味するぞ。それにだ、誰のお陰で〝ちょー〟一流のトラブルシューターになったと思っているのかね？》
「実力！！」
そう言うと夏凜はケータイのスイッチを強く押して地面にケータイを投げる寸前までいったが、それは途中で中止された。
「買い換えたばっかりだった」
美少年はふと上を見上げ何かを思い出しような、はっとした顔をして、もう一度どこかに電話をかけた。

帝都エデン――この街では凶悪犯罪が日常茶飯事、四六時中起きている。しかし、そんな危険なこの街を離れる者はあまりいない、その理由は誰にもわからない。今の科学では到底見当もつかない不思議な力が働いているに違いないと人々は首を傾

げる。この世界では魔法というものが普通に存在するので大抵の怪奇現象などは全て魔法ということにされて片付けられてしまう。

凶悪犯罪の件数は年々増加傾向にある。その犯罪が人間相手ならば帝都警察だけでも十分手に負えるだろう。しかし、相手は必ずしも人間だけではない。

『妖物』と呼ばれる合成生物（キメラ）たちが街で暴れだすと、帝都警察は重武装をしてその妖物に立ち向かって行く。小物であれば大したことはないが大物ともなれば、その戦闘風景はさながら戦争のようだ。

妖物たちがどこから来たのかは未だ謎とされている。一説にはどこかの生物兵器を扱う会社に雇われてマッドサイエンティストが創りだし、その会社が何らかの理由で倒産してしまい、キメラたちの処分に困った会社が街にそのまま放ったとも噂されるが、真意は定かではない。

妖物は毎日のように新種が発見され、そして、消えていく。

しかし、妖物の数は明らかに増えつづけている。

そこで帝都はある政策を打ち出した。その政策とは凶悪犯罪者および妖物の駆除に懸賞金を賭けることであった。そしてこの街に〝ハンター〟が生まれることとなった。

当初のハンターは帝都政府の依頼だけを受け賞金を受け取っていたが、今では一般人もハンターに依頼も頼むようになり、ハンターの仕事は日に日に広範囲に及ぶようになっていた。

凶悪犯罪者の処理、遺跡調査、モノ探し、妖物退治まで報酬

しだいでどんな仕事もこなすスペシャリストとなった彼らたちはハンターではなく〝トラブルシューター〟［問題処理屋］と徐々に呼ばれるようになっていった。

夏凛もその一人である。彼の名はトラブルシューターとして一流の功績と実績を挙げていて、裏社会で彼の通り名である『氷の花』の伝説を知らない者はいないだろう。

しかし、そんな彼だが、普段は清掃員の仕事に精を出している。裏の顔を知っている人物が清掃員の時の彼を見たら、きっと驚くに違いない、まるで別人なのである。氷の花の冷酷で無慈悲なイメージはそこにはない。そこにいるのは人当たりがよく、のほほんとした性格で仕事仲間のおばちゃんに人気があるただの美少年の姿だった。

夏凛は帝都でも三本の指に入る美人である。そのことと彼の普段の出で立ちから〝夏凛〟の知名度は高い。しかし、彼が『氷の花』と同一人物であることを知る者はあまりいない。

第2章　情報屋『真』

　太陽が南の空に浮かび、帝都の街に網の目のように張り巡らされたアスファルトの道をジリジリと焦がすころ。地上から一〇〇メートル以上離れたところで、夏凛はツインタワービル外壁の窓掃除をしていた。
　ツインタワーとはその名に由来する通り、同じ形の地上一〇〇階建て二つのビルが並んで立っていて、そのビルの中にはありとあらゆる店が軒を並べている。
　通称ウェストビルと呼ばれるビルには一般人の利用する、デパートや映画館などの店が軒を並べているが、向かい側にそびえ立つ通称イーストビルはコアな帝都民の巣窟と化していた。その理由はイーストビルの中にある店がどれも特殊極まりないからである。
　イーストビルの中には怪しげな魔導具を取り扱う店や探偵事務所、軍事兵器を横流しする店から暴力団組織のオフィスまでと、ありとあらゆる帝都の裏の顔がそこにはあった。
　ウェストビル三四階のビルの外で小型リフトに乗った薄い青色の清掃服を着て、同色の帽子を目元まで深くかぶった夏凛は、真夏の空の下、汗一つ流さず窓掃除をしていた。
　買い物に来た人々（この場にいるのは大半が女性だが）が、窓の外にいる美青年に注目の眼差しを向けている。いつもの景色だった。

　夏凛が窓掃除をしていると、いつの間にか人々が集まり、夏凛は清掃をしている姿をいつも熱い眼差しで見られている。
　帝都で一、二を争うと言われている美しさを持つ夏凛は、街を歩けば人々の注目を浴び、写真を一緒に撮ってくれるよう頼まれたり、プレゼントを行き成り渡されたりということが当然のことのように起こる。この一連の現象などを帝都の街では『夏凛アイドル化現象』と呼んでいる。
　夏凛がニッコリと笑い、集まった人々に手を振ると、店内からは奇声にも似た黄色い歓声が沸き起こる。そして、夏凛を乗せたリフトは上へと上がって行く。集まった人たちは窓に吸いつけられるようにへばり付き、上へと上がって行ってしまった夏凛を、彼の姿が見えなくなってもなお、彼の幻影を熱い眼差しで見続けていた。
　小型リフトで上へと上がる夏凛の口元から甘い吐息が零れる。
……いや、吐息ではなく〝ため息〟だった。
「ふぅ、さすがに夏場の窓拭きはしんどいよねぇ」
　夏凛がただのため息を吐いた仕草が甘い吐息を付いたような妖艶な仕草をする美しい絵に見えてしまう。
「夏の間は窓拭きのお仕事は無しにしてもらおうかな？」
　夏凛は週三日、同じ時間、同じ場所の窓拭きを三〇分間、ウェストビルに買い物に来た――いや、夏凛を見に来たお客さんの為にツインタワーの持ち主に頼まれてやっている。これをやる事により売り上げがだいぶ上がるらしい。つまり営業利益を上げる為の一種のショーなのである。そもそも、このビルでは

外側の窓掃除などはしていないのだった。

　小型リフトがゆっくりと動きながら五〇階へと到着した。この階で夏凛はリフトから降りる。

　夏凛の降りたこの階のこの部屋は夏凛の勤める清掃業者のオフィスになっている。

　リフトから降りて建物の中に入った夏凛を仕事仲間のおばちゃんたちがタオルやらジュースやらを持って笑顔で迎えてくれた。夏凛は仕事仲間のおばちゃんたちに大変人気がある。

　夏凛はタオルを受け取り、かいてもいない汗を拭くフリをしておばちゃんに返した。

「どうも、ありがと」

　と夏凛が言うとタオルを返されたおばちゃんの頬が桃色に染まった。

　夏凛は返したタオルはこの後どのように使われるのかと思ったが、色んなことを想像してしまい結局考えるのが恐くなって途中で止めた。

　おばちゃんの一人が紙コップに入ったオレンジジュースを夏凛に差し出し、まだか、まだかと夏凛が受け取るのをとろけるような熱い眼差しで待っている。

「ほら、外は熱かったろ、冷たいジュースでもお飲み」

　夏凛の自分に差し出されている紙コップを受け取り、オレンジジュースを一気に飲み干した。

「ありがと、美味しかったよ」

　と言って夏凛は紙コップをおばちゃんに返そうとしたが、彼

の腕が腑に止まった。夏凛が紙コップ返そうとした瞬間、おばちゃんが不敵な笑みを浮かべたのだ。まさに仔悪魔のような笑みだ。

それを見た夏凛は、

「……自分で捨ててくるよ」

と言ってこの部屋を足早に退室した。職場に馴染めるのはまだまだ先の話のようだ。

夏凛は今週になってこのツインタワーの清掃をするようにと上司に言われて他の場所の清掃からこちらの清掃に配属となった。前にいた場所でもおばちゃんたちに夏凛は大変人気があり、仕事始めの数ヶ月間はいつもおばちゃんたちに付きまとわれていた。これから数ヶ月間、またあの時と同じことを繰り返すのかと思うと夏凛は少し憂鬱になった。

夕方になり夏凛の一日の仕事が終わった。

夏凛はおばちゃんたちに夕食を一緒に食べに行こうと誘われたがそれを上手く交わし、彼は普段着であるゴスロリに着替え、ある場所に向かった。

イーストビルとウェストビルは一〇〇階と五〇階にある通路で繋がっており、夏凛はその通路を使ってイーストビルへと入って行った。彼が目指しているのは四六階にオフィスを構える情報屋『真』のオフィスだ。

エレベーターが口を開けるとその中から芳しい匂いと共に女性を抱きかかえた夏凛が優美な足取りで降りてきた。女性は意

識を失っている。
「香りが少し強いのかなぁ？」
そうつぶやいた夏凛はその女性を抱えたまま真のオフィスへと足を運んだ。
夏凛がオフィスの中に入ると受付嬢がニッコリと微笑み軽く会釈をした。
「こんにちは、夏凛様。今日は何の御用でしょうか？」
受付嬢の歌うような声が静かなロビーに響き渡り、まるでここだけ春が来たような清々しさに包まれる。
「この女の子がエレベーターで気を失っちゃって」
「畏まりました。いつも通り救急車を呼んでおきます」
そう、これはいつものことだった。
夏凛とふたりっきりで密室であるエレベーターに乗ってしまった女性は気を失ってしまうことが多い。別に夏凛が何かをしたというわけではない、夏凛はただエレベーターに一緒に乗っている女性に笑顔と芳しい〝香り〟を振りまいただけだ。それだけで女性は気絶してしまったのだ。
夏凛は女性をソファーに丁重に寝かせて、受付嬢の側に歩み寄ってこう言った。
「あのねぇ、真くんに会いたいんだけどぉ」
受付嬢の頬が少し赤らんだ。なぜなら、夏凛が自分を甘える仔犬のような瞳で見つめているからだ。
そんな彼に見つめられてしまった受付嬢は言葉を忘れ、夏凛の顔をうっとりしながらただ見つめるだけだった。

「真くんはぁ～？」
　自分の顔を下から覗き込む大きく愛らしい瞳。はっとして受付嬢は我に返った。
「あっ、すいません、社長なら自室で妄想に耽っていると思いますけど……」
「ありがと」
　夏凛が甘い笑顔を浮かべ、受付嬢の手を優しく取り、彼女の手の甲に自分の唇で軽く触れた。それは彼女にとっての痛恨の一撃であり、それを受けた受付嬢はその場に失神してしまった。
「……救急車まだ呼んで貰ってないのにぃ」
　仕方なく夏凛は、カウンターに置いてあった電話の受話器を手に取り自分で救急車を呼ぶハメになってしまった。
　電話をかけると直ぐに受話器の向こう側から、
「救急ですか消防ですか？」
　というオペレーターの声が聞こえてきた。
「あのぉ～、人が気絶しちゃったんだけどぉ」
「……また、夏凛さんですか？」
　少しため息交じりの声が返ってきた。人を気絶させてたりして度々救急に電話をかけている夏凛はオペレーターに覚えられてしまっているらしい。
「うん、今日はツインタワービル四六階の情報屋真のオフィス」
「すぐに救急車を向かわせます」
「じゃあ、よろしくね」

15　トラブルシューター夏凛（♂）

電話を切った夏凛は真のいる部屋へと向かった。
部屋の中はプラグやコンピューターだらけだ。部屋の壁はねずみ色の金属でできており、部屋中を無数のプラグや何に使うのかまったく見当のつかない機械がゴロゴロとしている。
部屋の真ん中にはプラグを全身に繋がれた男が座っている。その男は変な機械を頭から目元まですっぽりとかぶっていた。
夏凛はその男に声をかけた。
「真くん、遊びに来たよ〜ん♪」
返事がない、その代わりに意味不明な言葉が返って来た。
「な、なんだとぉー！　作者がへっぽこぴーな為ツイン，ズ途中打ち切りだとぉーっ！！」
真はいつも通りトリップの真っ最中だった。
「真くぅ〜ん」
夏凛は甘えた声を出してみたが、やはり真には届かないようだ。まだ真はトリップを続けている。
「燃え上がれ、燃え上がれ、燃え上がれ、なんとか〜♪　って本当に燃え上がったら大変なことになるだろ！！」
真は頭にかぶった装置によって、帝都のありとあらゆる情報を瞬時に検索し映像として取り出すことができる。今もどこかにアクセスして情報を見ているに違いない。
トリップしている真を無視して夏凛は自分の来た理由を勝手に話し始めた。
「え〜とねぇ、昨日話した料金の件だけどぉ」
「半額だ、それ以上は負けられんな」

「な〜んだ、やっぱり話は聞いてるのかぁ」
「当たり前だ。私の頭脳を持ってすればいくつもの細かい作業を同時に進めるなど容易いこと」
「料金は正規の額でいいから、ホシを見つけたら直ぐに連絡ちょーだい、ＯＫだよね？」
「それはいいが、なぜマフィアの男、それも小者などを探しているんだ？」
　夏凛は真にマフィアの男を探すように依頼をしていた。それはなぜか？
「ダメだよ、トラブルシューターは依頼人の許可がない限り依頼内容を人にペラペラしゃべっちゃいけないんだよぉ〜」
「そうか、なるほどその男が帝都美術館の絵画を盗んだわけだな……ほうほう、それで帝都に忠義を誓ってるマフィアのボスが激怒したわけか……」
「私が言わなくても、勝手に調べてんじゃん」
　情報屋『真』の実力を垣間見た夏凛だった。

　三日前、帝都美術館の倉庫に厳重に〝封印〟され秘密裏に保管されていた絵画が盗み出された。
　この事件はまだ報道陣の耳には届いていない為ニュースにはなっていないが、もし、このことが世間一般に知れ渡ることとなれば大騒ぎになり、新聞やＴＶなどは他のニュース枠を割いてこのニュースを挙って取り上げるに違いない。なぜなら盗み出された絵画は三番目に高い危険度〝Ｓ〟に指定されている魔

導具だからだ。
盗み出された絵画の題名は『反逆者』、古の時代の『魔術師』（神という説もあるが定かではない）が描いたもので、天使（駄天使＝悪魔）の絵が魂までも模写してある。
なぜこの絵画が危険度Ｓに指定されているかというと、描かれた天使がその絵から現実の世界へと出ることができるからだ。
絵から出てきた天使は世界に混乱をもたらすと言われている。過去にも何度か絵から出てきた天使によって多くの命が奪われたという。
今は大魔導士ヨハン・ファウストによって厳重に封印され天使が外に出ることはないが、もし、封印が誰かの手によって破られることがあれば……。
その絵画がマフィアの男に、それも下っ端の男に盗み出されるという大事件が起きたのだ。絵画を盗み出すように命令したのはマフィアのボスではないが、マフィアの下っ端独りにできる犯行ではないことは明確だ。つまり、その男はマフィアを裏切り、別の組織なりに命令されて絵画を盗み出したに違いない。
この帝都の街は女帝と呼ばれる人物が治めている。そして、その女帝を教祖として神を信仰する宗教がこの帝都には存在する。マフィアのボスは神を信仰していて、そして、教祖である女帝を敬っている。
帝都美術館は帝都政府が運営しており、そこには多種多様、異種異様なモノが数多く展示されている。そして、その展示品

は全て〝女帝〟所有の物となっている。
　つまり、マフィアのボスは、絵画を盗んだ奴が組織を裏切った上に女帝所有の絵画を盗んだことに激怒したのだ。そして、夏凛の所にマフィアのボスから依頼があった。
「……なるほど……盗んだ男を見つけ盗まれた絵画を取り戻す……これが依頼か……」
　真はまだ、トリップ中だった。
「あのさぁ〜真くぅ〜ん？」
「何だ？」
　夏凛に呼ばれた真は一瞬にしてコッチの世界に帰還して来た。
「ボクの仕事の依頼内容なんてどこから調べてるのぉ？」
「企業秘密だ」
「……っケチ」
「『……っケチ』とはなんだ、お前だって仕事の依頼内容教えてくれなかっただろ！」
「でも、結局全部バレちゃったじゃん！」
「ふっ……知るかそんなこと」
「……なんだよ、その態度……フンだ！！」
　夏凛は女の子のように可愛らしく顔を膨らませて顔を赤らめた。
「そんな顔をしても私にも通用しないぞ」
　——今、真は確かに『そんな顔を』と言った。真は頭から目元まで機械をかぶっていて夏凛の顔など見えないはずだ。しかし、真には見えていた。その理由は、真のかぶっている機械と

この部屋に浮かんでいる小型カメラに秘密がある。
真のかぶっている機械は脳に直接情報を送り込む為の機械で、この部屋に浮かぶカメラの映し出す映像に瞬時にアクセスすることが可能だ。
このカメラは真専用のカメラなのだが、彼はこのカメラ以外のカメラが映し出す映像も瞬時にアクセスすることができる。アクセスできるカメラはネットワークに接続されているカメラにかぎられているのだが、カメラ以外のものでもネットワークに繋がれていれさえいればどんなものにもアクセスすることが彼には可能だった。
夏凛の機嫌はまだ治っていないらしく彼はまだ膨れっ面をしていた。それを見た真は少しため息交じりで彼に言葉をかけた。
「いい加減にしろ、子供じゃないんだから」
「ど～せ私は子供ですぅ～」
夏凛は可愛らしくあっかんべーをして見せた。
「確かにそういう所が子供だな」
「あっ、言ったなぁー」
「最初に自分で子供だと言ったんだろう」
「自分で言うのはいいの！」
真は夏凛の言葉に深く肩を落とした。
「もう、用は済んだろう。さっさと帰れ」
「ハイハイじゃあね、バイバイ」
夏凛は真に背を向け、片手を上げるとこの部屋を後にした。
夏凛のいなくなった部屋からは、

「……な、なんだとぉ～！　大魔王ハルカゲーム化だとぉ。メディアミックスかぁぁぁっ！！」

そういう意味不明な真の言葉が部屋にいつまでもこだましていた……。

第３章　キリングドール

夏凛がイーストビルを出ると空にはもう星が煌き浮かんでいた。しかし、まだ辺りは明るい、夏は日が落ちるのが遅い。

「夕飯どうしよ……？」

イーストビルのすぐ横にあるウェストビルに戻れば、ファーストフード店から高級レストラン、少数民族料理まで、世界の古今東西の料理を食すことができる。

夏凛はウェストビルの中に入ると一階と二階とが吹き抜けになっているホールを進み、中央円形エレベーターを使って二階へ上がった。

二階の中央にあるエレベーターの周りは円状に下のフロアと吹き抜けになっており、エレベーターを中心に蜘蛛の巣のような道が張り巡らされている。デザイン的には美しいのだが使い勝手が悪いと利用者には不評だった。

夏凛はエレベーターを降りると迷うことなく歩き進み、『W』と描かれた看板と柄の悪いマスコットが印象的な一件のファーストフード店の中へと入って行った。

店内は人々で賑わっていた。しかし、夏凛が店内に入った瞬間、少しであるが沈黙が店内を包み込んだ。だが、すぐに店内はいつも通りの賑わいを取り戻した。

夏凛は列の最後尾に並び、上に表示されているメニューを見ながら何を食べようかぼーっとしながら考えた。

「（ヴァリューセットにしようかな、それともハッピーセット）」
「ご注文はお決まりでしょうか？」
「えっ？」
夏凛が視線を前に戻すと女性店員が頬を桜色に染めながらスマイルを浮かべていた。彼女の視線は泳ぎ回っている。そういえば店内にいる全員が夏凛と視線を合わせようとしない。
夏凛は結局ハッピーセットを注文して、店内で食べることにした。
「さぁ〜て、どこで食べようかなぁ〜」
店内を見渡すと、窓際のカウンター席が空いていた。夏凛は迷うことなくその席に腰を下ろした。
窓の外には美しい夜景が広がっている。
帝都の夜景はこの上なく美しく、まるで煌く星々を眺めているようだ。だが、遠くから見ている分には良いが、街の中に飛び込めば美しいとは言えない。いろいろな意味で汚れているのだ。
夏凛はハッピーセットに付いてきた今女子高生の間で人気の『へにゅぅ』と呼ばれるマスコットの人形を手に取った。
「これのどこが可愛いんだか？」
へにゅぅの容姿はゾウというかミジンコというかヒヨコのような不思議な生物だった。しかも羽まで生えている。
へにゅぅという名前は鳴き声が『へにゅぅ』であるから、そういった名前が付いたらしい。

夏凛はフライドポテトを親指と中指つまむと口の中にポンと放り込んだ。

「揚げたてじゃないなぁ〜」

夏凛はフライドポテト好きで、このファーストフード店にちょくちょく顔を出すことは有名な話である。

食事を終えた夏凛は自分のケータイにへにゅぅ人形を付けて、まだ中身の入っているオレンジジュースを片手に店内を後にした。

ウェストビルの外は蒸し暑かった。今夜も熱帯夜だ。

夏凛はストローをチュウチュウ吸いながら入っていないオレンジジュースを飲んでいた。中身のオレンジジュースはすでにない。ただ意味もなくチュウチュウ吸ってるだけだ。

夏凛はツインタワービル近くから出ているバス停へ向かった。

ツインタワーを出て真っ直ぐに道を進む夏凛の左右には、帝都で一番大きい公園——帝都公園が広がっている。

今夏凛が通っている道はその帝都公園の真ん中を通る道で、道を東側へ進むとツインタワーがあり、西側へ進むと大きな道路に出ることができ、そこにバスターミナルなどがある。

バスターミナルには大勢の人が集まっていた。

ツインタワーに買い物に来ていた人々や帝都公園に遊びに来ていた人々などが列を為している。

夕方のこの時間はいつも混雑していて夏凛は少し嫌気を差していた。

近くにはタクシー乗り場もあるが、会社からはバス運賃しか

支給されていないので仕方なくバスに乗っている。
　ツインタワーの売り上げに多大な貢献をしている夏凛は、会社側にタクシー料金を出すように数日前から交渉しているが、会社は首を縦には振ってくれないらしい。この頃は不況が続き、経費削減に努めているのだろう。
　ようやくバスに乗り込んだ夏凛は偶然にも座席に座ることができた。ラッシュ時のバスでは滅多に座れることなどなかったので、夏凛はすごく幸せを感じてしまった。立っている人と自分を比べてしまって優越感すら感じる程だ。

　バスを降りた夏凛は、人通りのない薄暗い道をストローをチュウチュウ吸いながら歩いていた。すると、彼の前にまるで待ち伏せをしていたかのように、道の角から黒いスーツを着こんだ一人の男が現れた。
　夏凛は無視して通り過ぎようとしたのだが、男の右手が煌き夏凛の服を掠めた瞬間、漆黒のドレスは切り裂かれ、次の瞬間には高く上げられた夏凛の左足は相手の手によって止められていた。
　夏凛は空かさず上体をひねり右足で男の頭を仕留めた。鈍い音が静かな道路になり響き、夏凛の左足は解放された。
　夏凛はアスファルトに両手を付き、そのまま飛び上がり身体を回転させ地面に着地し男と間合いを取った。
　静かな世界にまた鈍い音――〝金属音〟が鳴り響いた。男が不自然に曲がった首を両手で掴み無理やり元通りに治したのだ。

「人間じゃないのかぁ～。う～ん、あの手応えだとマシーンかな？」

夏凛を襲った謎の男は人間ではない、マシーンだ。マシーンの見た目は人間とほとんど変わらない、だがその身体能力は人間の比ではない。

マシーンが加速に入った。夏凛が瞬きをした刹那、マシーンはすでに夏凛に手刀で攻撃をしようと腕を振り上げている最中だった。それを見た夏凛は不敵な笑みを浮かべた。

「私を倒すなら、中古のＣ級マシーンではなく、最上級のトリプルＳのマシーンを遣して欲しいね」

夏凛の声の質が変わった。その声は冷たく鋭い。

マシーンの首が刎ねられた。首は地面を転がり夏凛の足元まで来て止まった。

「誰だか知らないけど、私も甘く見られたものだなぁ」

夏凛の足がマシーンの頭を粉々に砕いた。そして、彼は手に握った大鎌を強く握り直した。

帝都の街で大鎌を武器にする有名な人物は二人いる。その二人ともが普段は鎌をこと空間にしまって置いていつでも取り出すことが可能だった。

マシーンは頭を刎ねられてもなお動き続けている。首その物がなくても動くことはできるらしい。

首のないマシーンが夏凛に襲い掛かるが、その動きは先ほどに比べて遅い、いや悪い。マシーンの首を切り飛ばされた箇所から緑色の液体が噴出している。それが原因だ。

放って置いても時間が経てば動かなくなるに違いない。だが、相手は向かって来るのだ仕様がない。
夏凛の大鎌が大きく風を切り裂き、マシーンの身体までも真っ二つに切断した。左右に分かれたマシーンの身体は地面に金属音を立てながら崩れ落ちるようにして倒れた。手足はまだ動いている。
「しぶといなぁ～、でもそこでじっとしてるんだよ、朝になればゴミ収集車が運んでくれるからね」
夏凛はマシーンの残骸を一瞥すると昏い夜道を歩き始めた。
「この服気にってたのにぃ～」
そう言って夏凛はず～っと持ちっぱなしだったオレンジジュースのストローをチュウチュウと吸った。

第４章　マモンカンパニー

マシーンに襲われた次の日は日曜で、〝清掃作業員〟の夏凛にとっての休日だった。
その日の昼頃、ゴスロリ姿の夏凛は帝都の中心部から、やや東に位置する帝都公園にいた。
この公園は日曜であるということとツインタワーの近くにあるということもあり、家族連れやカップルで賑わい、噴水のある広場ではストリートパフォーマーのグループがMDコンポから流れるポップな感じの曲に合わせてダンスを披露し、その周りには人々が集まり歓声を上げていた。
そんな人々を後目に夏凛はスカートの裾を弾ませながら男の人と並んで歩いていた。
夏凛と一緒に歩いている男の顔は美しかった。
男の顔は中性的な妖艶さを放ち、背の高さは一七五から一八〇センチくらいだろうか。その男は夏だというのに、ボタンは全て閉めていないものの黒いロングコートを着ていた。
彼の名は時雨（シグレ）。帝都の街で一番美しいと言われる彼は『帝都の天使』と人々に呼ばれている。その名前を帝都の街で知らない者はいないのではなかろうか？
そんな彼は夏凛と同じトラブルシューターであり、そして、夏凛の兄でもあった。
時雨と歩く夏凛の表情は喜びと嬉しさでいっぱいだ。夏凛は

兄である時雨のことを溺愛していて、トラブルシューターになったのも時雨に対しての憧れからであった。
公園を歩く二人の前方にアイスクリームの販売車が見えてきた。それを見た夏凛はその車を指差し、こう言った。
「兄さま、あれ食べたい」
この光景を端から見たら、美男美女のカップルと間違えられるかもしれない。
夏凛は浮かない顔をした時雨の腕をぎゅっと掴み、強引に販売車の前まで小走りで連れていった。
アイスクリーム屋の前には数人の客がすでにいて、二人は順番待ちをした後、夏凛がチョコレート味と抹茶味のソフトクリームを注文した。
「チョコと抹茶一つずつね」
注文を受けた男性店員の目は泳いでいた。それもだいぶ前からから――夏凛と時雨がこの場に来た時からだ。
店員の目が泳いでしまっているその理由は、帝都でも三本の指に入る程の美人を二人も前にしているからだ。そして、この二人がなぜ一緒にいるかという疑問からだ。
この二人が兄弟であることを知る者はあまりいないし、夏凛がトラブルシューターであることを知る者もあまりいない、つまり二人の接点を美しいということ意外見出せないのだ。
ややあって店員が注文を繰り返した。
「チョコレートソフトと抹茶ソフトですね。畏まりました」
ソフトクリームはすぐに作られ、夏凛に手渡された。

「合わせて五五〇円になります」
　と店員が言うと時雨はコートのポケットから硬貨を取り出し店員に手渡した。
　帝都では現金よりもカードが主流なのだが、時雨は年寄りと同じく現金の方が使いやすいと思っている。
　近くにあった白いベンチから丁度カップルが立ち上がり誰もいなくなったので、二人は自然とベンチに腰を掛け、そこで夏凛は時雨に抹茶ソフトを渡した。
　時雨はお茶が好きなのだ。そのことを知っている夏凛は迷わず抹茶ソフトを注文したのだが、手渡された時雨の表情は浮かない、むしろ怒っているようにも見える。そして、それを見た夏凛の表情が曇る。
「どうしたの兄さま？」
　首を傾げ時雨を見つめるが返事は返ってこない。別のソフトクリームが食べたかったのか？
「ねぇ？」
「…………」
「怒ってるの？」
　この言葉にやっと時雨が口を開いた。
「もしかして、これだけの為に二日前の深夜に電話してきたの？」
　二日前の電話とは夏凛が路地裏で男を追い詰めて、真に電話をかけた後にもう一度誰かに電話をかけたあの時のことだ。つまり誰かとは時雨だったのだ。

夏凛は屈託のない愛らしい笑顔を浮かべて頷いた。
「うん！」
少し沈黙を置いた後、時雨はベンチから立ち上がり無言で夏凛を置いて帰ろうといた。
夏凛は慌てて時雨のコートの裾を引っ張って引き止めようとした。
「ま、待ってたら、さっきのはジョーダン、ホントは別の用件で呼び出したんだって！！」
不機嫌顔の時雨は夏凛の身体を三メートル程引きずった所で肩越しに後ろを振り向き夏凛の顔を細い目をして見た。
「本当にちゃんとした用件があるの？」
「もちろんですともぉ～」
「本当に？」
念を押して聞く時雨に対して、夏凛は何度もコクコクと頷いて見せた。
それを見た時雨の表情は呆れ顔といった感じだ。そして、時雨は深いため息を吐いた。
「はぁ、仕方ないなぁ、話だけは聞いてあげるよ」
「それでこそ兄さまぁ～！！」
二人はベンチに戻り腰を掛け直した。
時雨は未だ不服そうな顔をして夏凛を見て言った。
「それで、ボクに用事って何？」
この言葉に夏凛は急に真剣モードに切り替えて答えた。
「単刀直入に聞くけど、兄さまに帝都政府直々にある絵画を探

して欲しいって依頼があったでしょ？」
「さぁ、仕事の依頼についての情報は関係者以外に漏らすわけにはいかないから」
「真くんに頼んで調べはついてるんだけど」
「それでもダメ。ボクの口からは何も言えないよ」
トラブルシューターが仕事の依頼内容を他言しないのは当たり前のことだった。夏凛もそれを承知の上で時雨に聞いているのだ。
その時突然、二人の目の前に宙に浮かぶソフトボール程の大きさの金属でできた謎の球体が風を切りながら現れた。
二人にはこれが何であるのかわかっている。そう、これは情報屋真の偵察用カメラだ。真はこのカメラを使ってオフィスにいながら外の映像を見ることができる。
カメラに付属しているスピーカーからやや雑音交じりの声が聞こえて来た。
《二人のラヴラヴなデートの途中で悪いな》
その言葉を耳にした時雨はややうつむき加減で呟いた。
「……違うから」
「兄さまったら照れちゃって」
そう言いながら夏凛は笑顔を浮かべながら時雨の肩をバシッと叩いた。叩かれた時雨は憂鬱な表情を浮かべ、ため息をついている。
《二人ともなかなかのアツアツじゃないか。おぉそうだ、そんなことより、絵画を盗んだ男の所在がわかったぞ》

「どこどこぉ～？」
　夏凛はベンチから身を乗り出して宙に浮かぶカメラを覗き込むようにした。
　そして、真が夏凛に男の居場所を教えると夏凛はうんうんと頷き、真に言われた言葉を確認の為繰り返した。
「……つまりぃ～、絵画を盗んだ男は身を潜めて女と同居してるってことだよね？」
《そういうことだ。今も私の別の偵察カメラで男の部屋の前を監視してるが、男に目立った行動はないようだな》
　夏凛が何か言いたげな表情をして時雨を見つめた。見つめられた時雨は思わず夏凛に聞いた。
「どうしたの？」
「兄さまとのせっかくのデートだったのにぃ～」
「……仕事が入ったんでしょ、早く行って来なよ」
　時雨はそう言いながら、細い目をして夏凛に向かって小さく手を振った。
　それを見た夏凛は捨て台詞を叫んで走り出してしまった。
「兄さまのばかぁ……ぐすん」
　その走り去る姿は失恋をして走って行く女の子のそれによく似ていた。
「はぁ……」
　残された時雨が深くため息を吐くと、スピーカーから真が時雨に声をかけて来た。
「二人とも同じ依頼をしたのに、時雨の方は行かなくていいの

か？」
「……なんか疲れた」
そう言って時雨は肩をガクンと落とした。
澄んだ空には太陽がギラギラと輝き地面をジリジリと焦がしていた。暑さはまだまだ治まることはないらしい。

帝都の南に位置する住宅街。そこは、車を一〇分も飛ばせば海に着くという、海水浴場から少し離れた位置にあった。
その住宅街のとある一角にあるアパートに夏凛の探していた男は潜伏していた。
タクシーをそのアパートの前に止め、中から出て来た夏凛は、アパートを一瞥すると歩き出し、金属でできた階段を一歩一歩ゆっくりと音も立てず羽根が空を舞うようにふわりと登った。
階段を登りきった夏凛の表情は怒りに満ち満ちていた。しかし、歩き出す夏凛の足取りはやはり羽根のように軽く、スカートの裾は静かに波打ちふわりとしている。
プレートに２０３と書かれたドアの前で夏凛の足は止まった。そう、この部屋に男が潜伏していると真は夏凛に伝えた。
夏凛は左足でドアを勢いよく蹴破った。ドアはもの凄い音を立てながら部屋の中に吹っ飛び、床にドスンと言う音を立てながら落ちた。女の悲鳴と男の怒鳴り声が部屋の中から聴こえる。
夏凛は構わず土足で家の中へ上がった。部屋の住人の目が予期せぬ訪問者に一心に注がれる。
一瞬間を置いて男が窓から外へ逃げ出そうとした。夏凛は動

こうとしない、ただ一言を囁いたのみだ。
「逃げても構わないよ、……でもね。地獄の果てまで追っかけてアゲルから、ね」
アゲルからというところが妙に色っぽく、口元は笑っているが目はキレていた。
男は窓の手すりに片足をかけた状態で動きを止めてしまった。女性は顔面蒼白になり、手に持っていたカップを床に落とした。カップの中に入っていた黒い液体がカーペットを侵食していく。その侵食の早さよりも夏凛の動きは速かった。
夏凛は部屋の中央にあった背の低いテーブルを踏み台にしてジャンプし、男の首根っこを掴んでそのまま後ろに引きずり倒した。
男は腰を打ち咳き込む、しかし、夏凛はそれに構うことなく男に馬乗りになり黒いマニュキュアをした長い爪がわざと食い込むように右手で首をぎゅっと絞めた。
「君が『反逆者』を盗んだマフィアの反逆者かい？」
男の震えが夏凛の身体に伝わって来る。
「返事ができない子は好きになれないなぁ〜。ねぇ？」
夏凛は横で膝を突き震える女性に笑顔を向けた。普段ならばこの笑顔を見た女性は頬を紅く染めて、中には失神してしまう者もいるだろう。だが、今のこの笑顔を見ている女性は恐怖を感じずにいられなかった。
女性は立ち上がり叫び声を上げながら逃げようと駆け出した。
しかし、夏凛の左手が動いた瞬間に女性の動きが止まった。

　彼女の首筋には鋭い大鎌が突きつけられていた。少しでも動こうものなら命の保障はないだろう。

「逃げてもいいけど、その時は死ぬ覚悟でね。さてと、反逆者はどこかな？」

　男に視線を落とした夏凜のその表情は妖艶さを纏い、人をかどわかす美しさを持っていた。

　つめたい汗を流す男の目は視線が定まっていない。

「仕方ないなぁ～」

　と言って夏凜は首を絞めていた手の力を緩めた。すると直ぐに男はしゃべりはじめた。

「マ、マモンカンパニーに頼まれて……も、もう、俺の手元にはない……だから」

　しどろもどろにしゃべる男を見ている夏凜の表情は冷ややかだ。

「ふ～ん、マモンカンパニーねぇ～」

「マモンカンパニーに売っちまった。だから……」

「だから、だからなんだっていうのぉ～？」

　そう言いながら夏凜は男の腹にパンチを喰らわせ気絶させ、女性の首筋から大鎌を離し異空間にしまうと、女性は腰が砕けたように床にへたり込んだ。

　夏凜の口から甘いため息が零れる。

「はぁ、マモンカンパニーねぇ～」

　携帯電話を取り出した夏凜はマフィアのボスへと電話をかけた。

一時間もしないうちに反逆者の男を高級スーツで身を包んだ男たちが車に乗せて連れて行ってしまった。
夏凛は車を見送ると、頭を抱えた。
「マモンカンパニーねぇ～」
さっきからこればかりである。
マモンカンパニーとは、貿易を主にしている大会社の名前で、パンデモニウムというありとあらゆる事業に幅広く手を出している大企業の子会社である。
マモンカンパニーは主に電気機械などのルートに強く、裏社会に通じていて、武器や生物兵器の輸出販売をしているというのは公然の秘密であるほどの悪名高き会社だ。
パンデモニウムの子会社の中にはルシフェルという遺伝子や生物に関する研究をしている会社があり、この会社が生物兵器を作っているのではないかという噂があるが、パンデモニウムの裏には大物政治家などが多数付いているらしく捜査の手が回ることはない。
夏凛は大通りまで歩いて行くとそこで片手を挙げタクシーを捕まえ乗り込んだ。
「マモンカンパニーまでお願いね」
夏凛が後部座席に落ち着くと、タクシーは街路樹に一度ぶつかった後に発進した。
帝都の南、オフィスの立ち並ぶビル街から外れた場所にマモンカンパニーの本社ビルはある。港の近くにあるこのビルの周りにはこの建物以外の建物がない。

ビルはさほど大きな物ではないが、この辺りに立ってる建物がこれしかないことから異様なまでに目立つ。それにこのビルは何か威圧感のようなものを放っている。

タクシーから降りた夏凛の髪の毛を潮風がふわりと待ち上げる。そのまま彼は風に乗るように歩き、ビルの中へと入って行った。

ビル入り口には守衛が二人立っていたが、取り合えずそこでは止められることはなかった。だが、やはりこれ以上は進めないらしい。

受け付けロビーで夏凛は何度も受付嬢に社長に会わせて欲しいと懇願したが、アポイントメントがない方とは社長はお会いできないそうだ。夏凛のお願いに屈しないとはかなり出来のいい社員である。

夏凛は仕方なく奥の手を使うことにした。

彼の左手が舞い踊るかのようなしなやかな動きを魅せたかと思うと、辺りに強い薔薇の香が立ち込めた。するとどうだろう、受付嬢の瞳は虚ろになり、まるで魂の抜け殻のようになってしまったではないか――。

それを確認した夏凛は何も言わずエレベーターに乗ろうとした。がしかし、当然のことながら異変に気が付いた守衛二人が夏凛を静止しようと近づいて来た。夏凛はそれに全く動じず、先ほどと同じように左手を動かした。すると守衛たちも受付嬢と同じく虚ろな目をして、肩を落として魂の抜け殻のようになってしまった。

数人の社員が目を丸くするなか、夏凛を乗せたエレベーターはその扉をゆっくりと閉じた。
エレベーターは十三階で止まった。開いたエレベーターから、薔薇の香がフロア全体に広がる。
薔薇に香と共に夏凛がエレベーターの中から現れ世界の色を鮮やかに変える。そのまま彼は社長室へと足を運んだ。社長室の位置はすでに捜査済みだ。
社長室に行く途中何度か夏凛は呼び止められたが、皆、夏凛の近くまで来ると魂の抜け殻のようになってしまう。それは何故か？
夏凛は普段から色々な香を身に纏っている。その香は時と場合によって使い分けられる。香の効果は周りの人たちの興奮を押さえる香や眠らせる香、そして、自白させる香など多種にわたる。だが香の匂いは全て薔薇の香の為一般人にはその違いがわからないだろう。
今使っている香は嗅いだ者に起きたまま夢を魅させるという幻覚作用を起こさせる香だ。先ほど受付嬢に使った時は手から少量の香を出したが、今は全身からその香を出している。
社長室と書かれたプレートの下に立つと夏凛はドアを勢いよく両手で開けた。それと同時に社長室の中に薔薇の香が一気に流れ込む。しかし、社長室にいた者たちは誰一人幻覚に堕ちることはなかった。
部屋の中にはマモンカンパニーの社長である小さな男の子が椅子に座り、その右脇には秘書と思われる女性が一人立ってい

た。

マモンカンパニーの社長の名はゲイツ、若干九歳という若さである。年齢は九歳と言っても、この国で一番入ることが困難とされ、変人の集まる大学として有名な帝都大学を七歳の時に首席で卒業したという人間離れした経歴の持ち主で、神童と言われていた大天才である。

大学を卒業して直ぐにマモンカンパニーの親会社である『パンデモニウム』にヘッドハンティングされて、社長の座に就き、数多くの偉業を成し遂げている。

彼はＴＶなどのメディアなどにも顔を出すことがしばしばあり、帝都でもその顔は有名だ。

社長室は殺風景だった。デスク以外の家具は何もなかった。しかし、本当に何もないわけではない。部屋の各所には溝のようなものがあることが見て取れる。家具などは全て収納できるようになっているのだ。

ゲイツは指を組んで肘をデスクに付いた。

「遅かったじゃないか夏凛くん」

「あのへっぽこマシーンに私を襲わせたのは君なんだろぉ〜？」

夏凛は昨晩自分を襲ったマシーンがマモンカンパニーの差し金だということを確信していた。

「まぁね」

ゲイツはせせら笑った。この少年は全てを見越していたようだ。夏凛にはそれが気に食わなかった。

「あんなへっぽこマシーンを送りつけるなんて心外もいいところだね。それに私がここに来ることわかってたみたいじゃないか」

「夏凛くんがここに来るかどうかまではわからなかったけどね。絵画を探す依頼を受けたのは僕が調べさせたところ三人、一人は第一ステージのマシーン殺されちゃったよ。残る二人のうちどちらかがここに来るんじゃないかなぁ、と思ってただけさ。そんなとこ」

「第一ステージねぇ。だからあんなに弱い刺客を送って来たわけ？」

「これはゲームなんだから、最初っから強い敵が出てきたらゲームバランスが悪くなっちゃうだろ」

「じゃあこれはファイナルステージってところなの？」

ゲイツ少年はまたせせら笑った。

「残念でした。先はまだまだ長いよ」

「!?」

世界が揺れた。夏凛は身体のバランスが崩してしまったのだ。そして、彼はそのまま突然床に大きな口を開いた暗い穴の中に落ちてしまった。

床に開いた闇に通じる穴はゆっくり閉じられた――。

「社長そろそろ、お約束の時間が――」

秘書の言葉にゲイツはゆっくりと立ち上がり、社長室を後にして行った。

社長室のドアが閉まる寸前ゲイツは小さな声でこう呟いた。

「生きてまたここに来られたら、その時が……」

第５章　大下水道

暗い大きな長方形の筒の中を落ちていく――。
一〇メートル、二〇メートルと身体が地球の引力に引かれるなか、夏凛はスカートが舞い上がらぬよう押さえながらこの危機的状況について考えた。
このまま地面に落下すれば、まず普通の人間では助からない。潰れたトマトより悲惨な状況になることは明白だ。だが夏凛の考えていることはそれではない。
夏凛の足が地面にふわりと羽根が落ちるように音もなく触れた。そして、彼は暗闇に包まれる上を見た。
「う～ん、登るのどうしよ」
夏凛が考えていたのは着地の心配ではなく、脱出の方法だった。
地面に何事もなく着地した夏凛。彼は何か不思議な魔法でも使ったのか？　それとも彼の美しさは重力すら無効にしてしまうのか？
上へ登るのは無理そうだ。それ以前に辺りは暗闇に包まれ何も見えなかった。だが突然ライトが点けられ辺りを強く照らした。
一瞬目を細めた夏凛であったが直ぐに目を大きく見開き、自分の居る場所の現状を見た。
「あらら～」

床には紅くこびり付いた染みが各所に見て取れる。そのまま目線を前方の壁の隅まで持っていくとそこには動物の骨が山済みにしてある。恐らくあれは人間の骨だろう。

スカートをふわりと巻き上げながら夏凛はバレリーナのように一回転し辺りをぐるっと見回した。

部屋の大きさは落ちて来た穴より断然広く、壁は頑丈そうな金属でできている。そして夏凛の目を一番引いた物は大きな鉄格子の扉だった。

「こっちが中か、あの向こうが中か？」

鉄の扉がぎしぎしと音を立てながらゆっくりと開き、しばらく経って中から巨大なキメラ生物三匹が奇怪な鳴き声と共に現れた。

「やっぱりあっちの為の鉄格子かぁ」

鉄格子の中から出てきたキメラの通称は『アーマー』、突然変異による自然発生型の妖物と言われている。その体長は約五〜六メートル、全身が硬い甲殻に包まれていて、くすんだ白い色をしている。そう例えるならば白い色をした巨大ダンゴムシのような生物だ。

「ムシこわ〜い」

寒気を発した夏凛の全身に鳥肌が立った。

アーマーの身体に埋め込まれている五つの赤い眼が計十五個、狙いを定めた。もちろん獲物は夏凛だ。

三匹の蟲が身体に似合わぬ俊敏な動きで夏凛に襲いかかる。

それを見た夏凛の顔は蒼ざめた。夏凛は大の虫嫌いだった。
必死で逃げる夏凛を蟲たちが『キシャーッ』という空気を吐き出す音を立てながら何本もの足をばたつかせ追いかけてくる。しかも三匹の蟲たちは確実に連携して動いている。アーマーは犬程度の頭脳を持つ蟲と言われていた。
そして、ついに夏凛は部屋の隅へと追いやられてしまった。その瞳には大粒の涙が浮かぶ。
「ムシヤダ、ヤダ、ヤダ〜っ！！」
悲痛な叫びだ。
どこからともなく取り出した大鎌を持つ手が震える。できればこの鎌でムシを斬りたくない。直接触れるなどもっと嫌だ。どうにかしてこの危機的状況を脱出できないものか？
三匹の蟲と夏凛の一方的な睨み合いが続く、どちらも全く動く気配はない。蟲は獲物を捕らえる準備をしているのだ。
冷たい汗が白い頬を滑り落ち地面で四方に弾けた。夏凛が一滴の汗を流した。これは驚くべきことである。
夏凛はどんなに暑くとも汗を流すことがなく、一部の間では『恐怖の汗かかない娘？』と呼ばれているそんな夏凛が汗をかいたのである。これは大事だ。この汗を回収すればきっとマニアの間で高値で売れるに違いない。
三匹の蟲が一斉に飛び上がり襲い掛かって来た。下部に付いた鋭い牙の生えた口が蠢いてるのがよく見える。
意を決した夏凛は鎌の枝を握り直し、飛翔し一匹の蟲の腹に当たる部分を切り裂いた。切り裂かれた腹から勢いよく緑色の

粘液が飛び出し夏凛の顔を汚した。

アーマーの甲殻はダイアモンド並みの強度を誇るが腹部に当たる部分はぶよぶよしていて柔らかい。そこを攻撃してやればいとも簡単に仕留めることができる。

アーマー一匹を見事仕留めた夏凛であったが、その表情は魂が抜けたように虚ろで、鎌が手から滑り落ちた。そして、床にへたり込み目を閉じた。

蟲たちが一斉に粘糸を吐き出した。

糸は宙を広がりながら夏凛に襲い掛かる。粘糸は彼の腕を捕らえた。足を捕らえた。そして、身体全体を捕らえた。

身体にベトベトと巻き付いた粘糸を取ろうと夏凛は悶えるが、動けば動くほど糸は身体に纏わり付き夏凛の自由を奪う。

糸の切れた操り人形に残り二匹の蟲が襲いかかる。

糸のキレた操り人形の口の端が少し釣り上がった。

「ああん、テメーらふざけんなよ、俺様を誰だと思ってんだオラッ！！」

粘糸を強引に断ち切り床に転がる大鎌を瞬時に拾い上げ大きく振り回した。

爆裂風が巻き起こり、真空を作り出し事により二匹の蟲は大鎌に吸い込まれるように切り裂かれ、緑色の粘液が夏凛の全身を汚した。

鎌を持ち立ち尽くす夏凛の周りで死に絶えた蟲は以前の原型を保っていなかった。そこにあるのはもはや細切れにされた肉塊だった。

　ふと、夏凛は我に返り慌てて大鎌を投げ捨てるように手放した。
「あっ……、あ、あなたたちぃ〜、私を怒らせると痛い目見るで御座いますよぉ〜……てへっ」
　先ほどの夏凛はまるで別人のようであったが、今の夏凛のしゃべり方も変だ。ずいぶんと動揺しているように伺える。
　夏凛はポケットからハンカチを取り出し顔をごしごし拭きポイっと投げ捨てると、後退るようにその場を離れた。
　辺りを見回す夏凛。出口はない。先ほど蟲が這い出てきた鉄格子もすでに閉じられている。
　途方に暮れる夏凛であったが、その時突然大きな音と共に金属の壁が一部ベコッと内側にへこんだ。
　何事かと壁を見ていると、大きな爆発音が鳴り響き壁に大きな穴を空けた。そして、煙の中から黒いロングコートを着た一人の男が現れた。
「兄さま〜っ！」
「げほっ、げほっ……」
　煙の中から現れたのは夏凛の兄である時雨であった。
　両手を大きく広げ時雨に駆け寄り抱き付こうとした夏凛であったが、すんなりと交わされた。
「兄さま、私のことが嫌いになったのぉ？」
「——汚い」
　この言葉を言われた夏凛は大きなショックを受けた。確かに夏凛の洋服はねばねばした粘糸と緑色をした粘液で汚されてい

る。
涙ぐむ夏凜。そして捨て台詞を叫んで走り出してしまった。
「兄さまのばかぁ……ぐすん」
やっぱりその走り去る姿は失恋をして走って行く女の子のそれによく似ていた。
「はぁ……」
残された時雨は肩を落とし深いため息を吐いた。

時雨の空けた穴を抜けるとそこは大下水道に通じていた。
「くっさ～い」
夏凜は思わず鼻を摘んだ。
下水道の中は埋め込み式のランプが取り付けてあるが、薄暗く遠くまでは見ることはできない。
帝都の下水道は危険極まりない場所だ。突然変異で体長一メートル～二メートルまで大きくなった巨大ネズミなどはまだ可愛いもので、下水に棲む大海蛇リヴァイアサンのその全長は六〇メートルから大きいものでは一〇〇メートルにも達し、時には帝都に局地的な地震を起こすことで有名だ。
ややあって時雨が追いかけて来た。
「先行かないでよ」
「……だってぇ」
まだ夏凜は涙ぐんでいた。
「せっかく助けに来てあげたんだから」
「助けに来てあげたんじゃなくて仕事で来たんでしょ？」

華奢で小柄な身体をした夏凛は、涙ぐんだ瞳で上目使いをして時雨を見上げた。その表情は激マブだった。
その時突然水しぶきが上がり、下水が大きく波打った。そして、巨大な海蛇の頭部が水の中から奇声を上げながら飛び出した。
下水とは不釣り合いに美しい、きらきらと光り輝き、透き通るような身体と鱗が二人の目に入る。
長い二本髭がまるでそれ自体が生きているように動いている。そうこれが帝都の下水に棲むキメラの中で最も出会いたくない大海蛇リヴァイアサンだ。
二人は顔をしかめた。できればこんなものとは戦いたくない、それが二人の本音だった。しかし、運命を皮肉なものである。
リヴァイアサンの尻尾の先が遠くで水面を叩き、水しぶきを上げたかと思うと、突然夏凛に狙いを定めて襲ってきた。夏凛についているアーマーの粘液の匂いに反応したのだ。
リヴァイアサンの頭は夏凛のドレスをかすったが、どうにか一撃目は避けることができた。しかし、リヴァイアサンの頭は蛇のようにくねりすぐさま二度目の攻撃を仕掛けて来る。
夏凛は何も握っていない腕を力強く振り下ろした。――その表情が曇る。
「鎌のストックが切れたぁ～!?」
夏凛は異空間に愛用の武器である大鎌を保管して置いて、いつでも取り出せるようにしている。その大鎌のストックが全て切れてしまったのだ。

大きな口を開けたリヴァイアサンの頭部が夏凛を喰らおうとしたその時、下水道がまばゆい光で包まれた。
その光でリヴァイアサンの動きが一瞬怯んだところを時雨は愛用の光り輝くライトサーベルのような妖刀村雨で、その胴体を輪切りにした。
リヴァイアサンの身体の一部が大きな音を立てて地面に落ちた。その切り離された身体は未だに蛇のような動きを見せている。
切られた頭部は時雨へとその身体の方向を向け、飛び跳ねるように襲い掛かって来た。
一瞬の出来事に避ける暇もなく、大きな口に生えている鋭い牙が時雨の身体を捕らえて離さない。
「兄さま！！」
夏凛の叫び声も虚しく、驚異的な生命力を誇るリヴァイアサンの頭部は、時雨の身体を捕らえたまま下水の中へと引きずり込んでしまった。
そして、そのまま下水の流れに乗り遠くへと流れて行き、ついには夏凛の視界からその姿を消した。
「兄さま〜っ！！」
手を伸ばすが、そこにはもう時雨の姿はない。
「兄さま、兄さま……のことだから心配しなくても平気だよねっ！」
伸ばした手はいつの間にか振られ、バイバイのポーズをしていた。

「さ〜てとっと、早く家帰ってシャワー浴びたいなぁ」
夏凛は本当に時雨のことを溺愛しているのだろうか？　時雨のことをよく知るからこそ取れる態度なのか……？
武器を失った夏凛だが、あの場所に置いてきた大鎌を取りに行こうという考えは全くない。蟲を切ってしまった鎌などもう触りたくもないのだ。
武器が無くとも夏凛は十分戦えるだけの戦闘能力を兼ね備えている。その華奢な身体からは考えられないほどの瞬発力・敏捷性・筋力を持っている彼は本来肉弾戦を得意としていた。鎌で戦うのは彼の単なる趣味だった。
薄暗い下水道の中を水の流れとは逆の方向に走る。ここは海が近いので水の流れに沿って進めば直ぐに海に出て地上に出られるかもしれないが夏凛はより自宅に近づく道を取ったのだ。
それに地上に出ることを夏凛のプライドが拒んだ。こんな汚れた身体ではタクシーも乗せてもらえないし、それ以前に人に見られることが恥ずかしい。こんな姿を人に見られたら週刊誌のネタにされて帝都市民の多くに自分の失態を広められてしまう。
このまま自宅近くのマンホールまで走って行こうと夏凛は心に強く誓った。しかし、自宅までの距離は六〇キロメートル以上あるだろう。夏凛が下水道を出れるのはいつのことだろうか？
走りながら夏凛は闇の中から自分が鋭い眼つきで何かに見られていることに気が付いた。というより、夏凛はそんな生物たちをなぎ払うが如く蹴飛ばしながら疾走を続けていた。

夏凛の足が不意に止まった。多くの生物がいる気配を前方から感じ取ったのだ。
ランプが備え付けられているとはいえ、下水道の中は薄暗い。そして、ここに漂う雰囲気がより一層暗さを深めていた。
闇の中に長い時間いたことによって、夏凛の目は暗闇に慣れ遠くまで見通せるようになっていた。
前方にいるのは巨大ネズミの大群だ。その数ざっと二〇匹以上。
ネズミたちは大型動物の屍骸に群がり貪り喰っている。
道は完全にネズミたちによって塞がれている。
追い払うには数が多い、蹴り飛ばして倒すにしても数が多い。勇猛な戦士だとしても、やはり一対複数には苦戦を強いられることは必定。
「わぁーっ！！」
夏凛は大声を出して巨大ネズミたちを追い払おうとしたが、普通サイズのネズミであったならば逃げ出したに違いない、しかし、巨大ネズミは身体も大きければ肝も大きいようだ。
ネズミどもは夏凛のことを一瞬睨んだような眼つきで一瞥すると、すぐに食事を再開した。
腕組みをして考え込んでしまった夏凛に対して、食事を終えたネズミたちは次の獲物をギロリと一斉にして見定めた。
「私？」
思わずそんな言葉を発してしまった。夏凛にも自分がこれから巨大ネズミどもに襲われることがわかったのだ。

まるで地面が波打つようにしてネズミ色のモノ近づいてくる。
「マジで!?」
予想していた結果とはいえ、一瞬身体を凍りつかせてしまって逃げるのに少し出遅れた。
走り出した夏凛の後ろを巨大ネズミの大群が差し迫っていた。可愛くとも何ともない巨大ネズミの鋭い前歯が、夏凛の足に噛み付こうとした刹那。ネズミたちの動きが急に止まり、夏凛も身動きを止めた。
下水の流れる音以外の音が一切止んだ。
夏凛は目だけを動かし辺りの気配を探り、ゴクンと唾を呑み込んだ。
波打つ下水。そして、波間から覗く煌く鱗。
水しぶきを上げながら巨大な頭を出し、再び夏凛の目の前に現れたのは帝都大下水道に棲む大海蛇リヴァイアサンだ。
生息数の少ないリヴァイアサンに一日のうちに二度も出遭うなど何たる不幸なことか……。
身動きすること、逃げることを放棄してしまった巨大ネズミたちに巨大な口が喰らい付き、呆気なく丸呑みにされた。
呑み込まれていくネズミたちをただ呆然と眺めてしまっていた夏凛は、ふと我に返り逃げ出した。リヴァイアサンがネズミたちを喰らっている今ならまだ逃げ切れる。
だが、しかし、夏凛の考えが読まれていたかの如く、ネズミを喰らっていた筈のリヴァイアサンが状態をくねらせて、大きな身体で夏凛の行く手を塞いでしまった。

走るポーズをしながら夏凛は身動きを止めてしまった。そこへリヴァイアサンがその頭を槍のようにして襲い掛かってきた。
「あ、あのね、私の身体ムダなお肉ないからおいしくないと思うんだよね……」
夏凛の懇願虚しく、獲物をその大きな口で喰らい付こうとするべく襲いかかったのだが、巨大な口はガシッという歯の噛み合わさる音を立てて空を噛み千切り首を大きく横に振った。
「わおっ！」
両手で地面を付き、倒れるようにして夏凛はリヴァイアサンの攻撃を紙一重で避けることができた。
蒼い顔をする夏凛。汚い地面に手を突いたことが相当ショックだったらしい。
地面に手を付けたまま辺りを見回すと入り口の小さな横穴が目に入った。
すぐさま地面を蹴り上げ穴の中へ飛び込もうとした夏凛の後ろからは、リヴァイアサンが鋭い剣の並んだような歯で喰らい付こうとしている。
穴の中に飛び込んだ夏凛の後ろでリヴァイアサンが、激突した頭で少しコンクリートを砕き頭の先を穴の中に押し込んできた。
尻餅を付いたような格好になってしまっている夏凛の足に、リヴァイアサンの長く伸びた髭が触れ、歯を何度もガシガシと鳴らしている。その口からは涎が垂れ流れ、臭い息が夏凛に吹き付けられている。

獲物を目の前にしてリヴァイアサンは、これ以上進むことができないらしい。
ほっと胸を撫で下ろした夏凛は、穴の中を進むことにした。穴の中は何一つ全く見えない闇だった。しかも、穴の縦幅が狭い為に夏凛は止むを得ず四つん這いになって穴の奥へと進んでいた。
手や膝は汚れるし、暗闇なのでわからないが服もきっと汚れているに違いない。ただ、幸いなことに、まだ、変なものを手や膝で踏んづけてはいない。
地面であるコンクリートは小さな砂でザラザラする感触がするもののそれ以外は比較的綺麗だった。
恐怖心を感じながらも手探りをして、勇敢に前へと進む夏凛の手にぶよぶよとした感触のものが触れた。脂肪の塊のような物体が前に存在する。
「きゃあ〜っ！！」
小さな穴に大きな夏凛の叫びがこだまする。
夏凛は元来た道を全速力で逆送した。世界のどこかにハイハイのスピードを争う競技があったとすれば、今の夏凛は世界一の栄冠に輝くことは間違えないだろう。
闇の奥に見える光――出口だ。
幸いなことにリヴァイアサンの姿はなかった。
穴の外に出た夏凛はマラソン選手がゴールした時のように両手を挙げ、心から喜んだ。
最初に穴に飛び込んだ時は危機的状況にあった為に、その穴

が何であるか考える余地もなかったが、今ならわかる。
帝都の下水道全体に生息範囲を持つ巨大回虫コブダラケ。その回虫は細く伸びた身体に無数のこぶを持ち、口から吐く溶解液で下水道の壁に穴を空け、そこに巣を作る習性を持つ。夏凛の飛び込んだ穴は、そのコブダラケの巣だったのである。
グロテスクなコブダラケを想像して、それに触ったかと思うと、もう死んでしまいたいくらいだと思う程だ。
大きく首を横に振って、コブダラケのイメージ映像を頭から振り払った夏凛は気を取り直して、再び下水道の中を走り出した。
こんなところで死ぬなんて自分のプライドが許さない。自分の美しい屍をネズミに喰われるなんて以ての外。
夏凛は気合い全開だ。

第６章　夏夜の逃走

マンホールの蓋を開けるともう辺りはとっくに日が落ちて蛍光灯の光が道路を照らしていた。
「もう限界ぃ……」
穴の中から夏凛が死相を浮かべ這い出て来た。
下水道での出来事は夏凛にとって大冒険であり、そんじゃそこらの罰ゲームよりもこたえた。しかし、彼はプライドでそれを乗り切りついに自宅前に辿り着いたのだ。
下水の匂いで鼻が可笑しくなってしまった。それでも自分にこびり付いた悪臭はわかる。そこで夏凛は手持ちの香水をありったけ自分に振りまいた。
夏凛は初恋以上にドキドキしながら自宅マンションの中に入った。
エレベーターが直ぐ面前にあるが使えない。開いた瞬間に人と鉢合わせということが十分考えられるからだ。
人の気配を敏感に探りながら慎重に階段を駆け上がる。夏凛の住む部屋は二三階だ。そこまで人と遭わなければいいのだが……。
夏凛の足が突然止まった。耳を澄ますと階段を下りてくる音が聞こえる。
「(なんで、階段なんか使うのぉ)」
と頭の中で考えながらパニック状態に陥り、足踏みをする夏

凛。
　二三階まではあと二階、もう少しで、もう少しで部屋に着くというのに……。
　階段を下りる音が徐々に近づいて来る。仕方なく夏凛は二一階のフロアに飛び出した。そして、そのまま走る。別の階段まで走る。とにかく走り抜ける。
　そして、どうにか別の階段まで辿り着いた夏凛は階段を全速力で駆け上がろうとしたのだが、またも上から人の気配が！
「なんか変な臭いがするな……」
　上の方から男のぼやくような声が聞こえてきた。
　上には確実に人がいる、元来た道はまだ人がいるかもしれない、夏凛は止むを得ず全速力で階段を下りた。そして、つい恐怖心から一番下まで下りてしまいマンションの外に飛び出して来てしまった。
　パニック状態でマンションの周りをウロチョロしていた夏凛の目にあるものが飛び込んできた。それは遥か上まで続く排水用の白いパイプだった。
　夏凛はパイプを両手でしっかりと握り締め、片足を壁に掛けてゆっくりとパイプを登り始めた。このパイプを使って上まで登る気なのだ。今の夏凛は途中で人に見られた時のことまで頭が回っていない。
「おい、あれ見ろよ。誰かパイプで登ってんぞ」
「おっ、すっげ。マジで誰か登ってるよ」
　下から聴こえてきた声に夏凛は一瞬身体をビクッとさせて、

恐る恐る地上を見た。するとそこには若い男が二人、コンビニの袋を片手で持ちながら自分を指差しているではないか。
「おい、よく見ろよあれ。夏凛じゃないか？」
「スカートの中カメラで撮ったら高く売れんじゃねえの？」
下からの声に耳を傾けながら夏凛は『スパッツ穿いてるからだいじょぶなの』と思い、
「こ、こんばんわぁ〜♪　あんまり指差さないでくれぅ、他の人に気づかれちゃうでしょ〜、ね、ね、ねっ！！」
と言って全速力で上へと登った。
そんな必死な夏凛の姿を二人の若者は口をポカンと空けて見送ってしまった。
必死だったことで、ついつい夏凛は屋上まで登ってしまった。
パイプを登っている変な姿は見られてしまったが、自分が臭いということは気づかれなかった。夏凛はそれで満足だった。
ドキドキ感で夏凛は必要以上に息が上がってしまい、肩で息をしながら出入り口までゆっくりと歩いた。
ドアノブに手を掛けた夏凛の身体が凍りつく。
ドアノブを思いっきり揺さぶり、引いたり押したりするが開かない。閉じ込められたようだ。
仕方なく夏凛は登って来たパイプの所まで行き、地上を見下ろした。
人がいないことを確認した夏凛は再びパイプを使い、自分の部屋のある階まで行くことにした。
自分の部屋のある二三階までどうにか辿り着くことができた

夏凛は安堵感でいっぱいだ。がしかし、夏凛の部屋は角部屋で、ここは正反対の位置にある角部屋の前だった。
『コ』の字状の道を駆け抜ける。これが最後の難関だ。
夏凛は残る全ての力を使い走った。各部屋のドアが流れるように次々と後ろに消えて行く。
第一コーナーを見事に曲がり、第二コーナーも華麗に曲がり切った。残るは最後の直線だ。
あと、二つドアを通り過ぎれば自分の部屋だ。という時、夏凛の部屋の手前の部屋のドアが突然開き壁のように立ちふさがった。が、夏凛はそのドアを蹴り飛ばし、部屋から出てこようとしていたであろう住人を家の中へと無理やり押し込め、自分は目にも止まらぬ早さでドアの鍵を開けて自宅へ飛び込んだ。
そして、鍵を素早く閉め地面にへたり込んだ。
「ふぅ〜」
一息付いた夏凛は靴を脱ぎ飛ばし、お風呂へと駆け込んだ——。

シャワーの水しぶきが白い肌の上で踊り、そのまま床のタイルまで滑らかな曲線の上を滑り落ちる。
優美な曲線を描く体のラインから白い湯気が立ち上がり天井に水の雫を作る。
汚れを一度洗い流した夏凛は、スポンジを手に取り薔薇の香のするボディソープを付け泡立てると、しなやかに伸ばされた指の先から肩の付け根まで柔らかに肌を包み込むスポンジをや

さしく滑らせた。
「……あん♪」
至福の時を迎えている夏凛の口から思わず甘い吐息が零れ落ちてしまった。
その時だった、玄関付近から爆発音が聴こえた。
慌てて、夏凛は身体に付いた泡を洗い流しお風呂から出ると、白いバスローブを手に取り急いで着替えて玄関へと走った。
「ドアが壊されてる……侵入者は！！」
何者かのパンチが夏凛の背後から繰り出される！
危険を感知した夏凛はしゃがみ込みそれを交わすと、すぐさま回し蹴りを放った。
硬く鈍い音が玄関に響いた。
「硬ぁ〜い、痛ぁ〜い」
夏凛を襲った相手はまたもやマシーンだった。
無表情なマシーンの手が素早く腰に動いたかと思うと、次の瞬間にはハンドガンから銃弾が発射されていた。
素早くジャンプした夏凛であったが、この狭い空間、そして近距離で放たれた銃弾を完全に避ける術はなく、鉄の弾は彼の左肩を貫いた。
鮮血を流しながらも夏凛は飛翔し、右手で相手の頭のてっぺんに手を突き、そのまま回転しながら相手の後ろに周り地面に着地した。体操選手さながらの華麗な動きだった。
マシーンは振り向きざまに銃を乱射したが、そこにはもう夏凛の姿はない。

通常モードからマシーンは赤外線アイモードに切り替えたが、人間の姿を確認することはできなかった。夏凛はどこに消えたのだろうか？
その夏凛はベランダにいた。
「今度のマシーンは、工業用じゃなくて暗殺専門のA級キリングドールか……チッ」
舌打ちをした夏凛の表情は険しぃ。
前回夏凛を襲ったマシーンは工業用上がりの中古マシーンだった。だが今回は違う、暗殺専門のA級キリングドールだ。
マシーンは使われる用途によってその種類が違う。兵器としてのマシーンは、暗殺用や殲滅用などがあり、それらをまとめてキリングドールと呼んでいる。
――刹那、窓ガラスが弾け飛んだ。マシーンに見つかり発砲されたのだ。
逃げ場を失った夏凛は次の瞬間にはベランダから地面へダイブしていた。
「行き成り撃ってくるなんてズルイぃ〜」
マンションの二三階からバスローブ姿の夏凛が落ちてゆく――。
風圧で髪留めが飛ばされ、髪の毛が舞い上がり逆立ちしながら激しく揺れる。もう、濡れた髪の毛は風圧によって乾いてしまったに違いない。
そして、夏凛の足が地面にふわりと羽根が落ちるように音もなく触れた。これはあの時と同じだ。

「さすがに死ぬと思ったぁ〜」
銃声音が遥か頭上でしたと思った次の瞬間には、夏凛の足元のコンクリートは砕かれ銃弾が埋まっていた。
「あんなところから狙ってくるなんて反則ぅ」
頭上ではマシーンが夏凛の部屋のベランダから下に向けて銃を構え獲物を狙っている。
「さすがはマシーン、目はいいね……あうっ！！」
頭上から何発も連続で放たれる銃弾に踊らされる夏凛は、そのまま軽快なステップを踏みながらその場から逃げ出した——。

白いバスローブを着た髪の毛ぼさぼさの夏凛が、深夜の街の涼しい空気を肩で切りながら駆け抜ける。
後ろからはキリングドールが全力出力で無表情のまま追いかけて来る。
「確かに私は『最上級のトリプルSのマシーンを遣して欲しいね』って言ったけど、Ａ級以上のキリングタイプは生身の人間が相手できないなんて小学生でも知ってるよ！」
大声を張り上げた夏凛とマシーンの距離は徐々に狭まって行く。このままでは追いつかれるのは時間の問題だろう。
深夜の住宅街を駆け抜け、大通りへと出た。この道は二四時間運行の駅ターミナルに続く大道で、深夜でも人や車の往来が多い。
そんな人目に付く中、夏凛は左肩を真っ赤に血で染めたバスローブ姿という目立つ格好で走っていた。人目を惹いてしまう

のは当然だ。
歩道を駆け抜ける夏凛を人々は目を丸くして魅入って騒ぎ立てる。
その後方では爆発音が次々と鳴り響いている。夏凛はその音に見向きもしない、爆発音の理由はわかっている。
夏凛を狙うキリングドールは車道を突き進み接触した車を次から次へと吹き飛ばし大破させていく。
炎上した道路を走る無表情のマシーンには傷一つ付いていない。
「こんな大騒ぎになっちゃって、どう言い訳しようか？」
頭を抱えて悩む夏凛の目に大型バイクにまたがり口をポカンと空けて遠くの爆発を眺める青年が目に入った。
すぐさま、夏凛はバイクにまたがる男を突き飛ばし自分がバイクに乗ると、そのまま何も言わずにバイクをかっぱらって逃走した。残された男は口をポカンと空けたまま過ぎ去って行くバイクをどこまでも目で追っていた。
盗んだバイクは改造が施されており、時速三〇〇キロメートルまで出せるようになっていた。
アクセルは限界まで回され、エンジンは嫌な音を立てている。さすがに改造されているといっても、エンジンが耐久し得るかまでは保障されていないらしい。
それでも夏凛は全速力でバイクを走らせ、大通りを抜け、裏路地を抜け、時には民家を抜けて、雑貨店の前まで来て、そこでバイクのエンジンを切った。

後ろにはまだキリングドールの影はない。ずいぶんと距離を離したに違いない。
閉められたシャッターの上に掲げられた看板には『ＺＩＺＺ』と書かれている。
雑貨店ＺＩＺＺ――。日用品から非日用品まで豊富な品揃えを売りにしている店である。帝都のパンフレットにも『美男子の店長のいる店』として載っている有名店である。そして、その美男子店長というのが他でもない、夏凜の兄である時雨だった。

第７章　兄さまがんばれ！

数十分前――。
時雨――彼は帝都で一番美しい。そして、今は帝都で一番臭かった。
「……死ぬぅ」
帝都の駄天使は、帝都地下に棲む大海蛇リヴァイアサンと呼ばれる怪物との死闘の末、下水に引きずり込まれてしまった。
下水に引きずり込まれた後、どうにか九死に一生を得た時雨は我が家に帰って来て、家の前で安堵感から立ち尽くしていた。
「……夏凛なんか助けるんじゃなかった」
しばらく、ぼーっとした後、時雨は家の脇にある階段で二階へと上がった。一階はお店となっていて自宅の玄関は二階にあるのだ。
コンコンと叩いてドアをノックする。ちなみにドアの脇にはインターフォンも付いている。
「ハルナちゃん開けてぇ～」
ややあってドアは開けられ、チェーンロックの掛けられたドアの隙間から眼鏡をかけた女の子がこちらを覗いた。
「おかえりなさ～い、ふぁ～……っ!?」
いきなりドアが勢いよくバタンと閉められた。しかも、その後ガチャという鍵を閉める音もした。
理由は明白だった。ドア越しで声が聞こえた。

「テンチョ、クサイですよぉ！」
時雨は臭かった。それも今は帝都一臭い。
「臭いのは自覚あるから、開けて」
「イヤですよぉ〜、鍵は開けておきますけど……あたし、寝室にこもりますから、少ししたら入ってくださいね。それから、シャワーとか浴びて綺麗になったら、部屋中にバケツで芳香剤まいといてくださいね」
ガチャと鍵が開けられた。――しばらく待つ。――もう少し待つ。――そしてドアを開ける。
ゆっくりと開かれるドアと共に異臭が家中に流れ込む。
時雨急いでシャワールームに直行。そして、脱衣所で着ていたコートや服を脱ぎ、瞬間乾燥機付きの洗濯機に服を全部入れてスイッチオン。
いつもどおりの行動をした時雨はお風呂に入った――。
夏凛は店の裏に回り、音を立てながら階段を上ると玄関を激しく叩いた。
「兄さま、助けてぇ〜！！」
「兄さまぁ〜っ」
反応がない。
ややあってドアは開けられ、チェーンロックの掛けられたドアの隙間から眼鏡をかけた女の子がこちらを覗いた。
「夏凛さん、なんですかぁ、こんな夜更けにぃ〜……ふぁ〜」
そう言って女の子はチェーンロックを外してドアを開けた。
ドアの向こうに立っている女の子はネコしゃん柄パジャマ姿

を着て、ぼさぼさ頭を片手で掻き揚げながら、もう一方の手は大きなあくびをしている口に当てていた。
「ハルナ姫、取りあえず中入れて」
「ふぁ～どうぞ～」
ハルナによって中に通された夏凛は、辺りをきょろきょろ見回しながら居間へと歩いて行く。
その後をドアの鍵を閉め終えたハルナがちょこちょこと付いて行く。
「いつ来てもこの家は奇麗に片付いててホコリ一つないよね、姫のお陰だね」
「そんなぁ～、照れますぅ」
ハルナは時雨の本業である雑貨店の店員兼なまけもので、どうしようもない時雨の身の回りの世話役を住み込みでしている女の子で、歳のころは一〇代後半から二〇代前半らしいのだが顔立ちのせいかもっと若く見える。中学生、もしくは小学生と言っても通用するかもしれない。
居間に着きゆったりと腰を下ろしている夏凛にハルナが紅茶を出そうと台所に行っている頃時雨は、もうもうと湯気を肌から上げお風呂場から出てきた。次に彼は身体を拭き、そのまま裸のままドライヤーで髪の毛を乾かす。
髪の毛を乾かし終わると洗濯機に入れてあった衣服を取り出す。衣服はすでに瞬間乾燥機により乾いている。そして、着る。
帝都の天使と呼ばれる時雨はいつも同じ格好をしている。同じ服をいっぱい持っているのではなかった。いつも同じ服を着

ていたのだ。……洗っているだけマシと言ったほうがいいのだろうか？
三階に上って部屋に行こうとした時雨であったが、その足が不意に止まった。居間の電気が点いているということと誰かの会話が聴こえて来たのだ。だが、ハルナがTVを見ているのだろうと思ってそのまま階段を上った。が……、
「どうぞ」
「うん、ありがとぉ」
ハルナの声とは別に聞き覚えのあるブリッ子した声が……聞こえた。
「ああ〜っ！！　どっ、どうしたんですか、こんな格好でしかも肩から血が出てるじゃないですかぁ〜！！」
「気付くの遅いよ姫」
時雨の頭にある名前が過ぎった、〝夏凛〟。その名前が頭に過ぎった瞬間、時雨は階段を急いで降りようとして階段から転げ落ちて腰を強く打ってしまった。
腰を打ちつけながら時雨はふらふら歩きで居間のふすまを勢いよく開けた。そして叫ぶ
「なんで夏凛がいるの!?」
「兄さま、こんばんわ」
バスローブ姿の夏凛はティーカップを持ち上げながらにっこりと微笑んだ。その姿はまるでお風呂上りのここの住人のようだ。
この家の偽住人夏凛の顔をあからさまに嫌な顔で見る時雨の

手は、まだ、ふすまを開けたままの斜め上三〇度の位置で止まっていた。
「だからなんで夏凛がいるの？」
あからさまに嫌な表情をしている時雨に笑みを送り続ける夏凛。
「兄さま、だいじょぶだったあの後」
「だいじょぶなわけないでしょ、ボク泳げないんだから！」
そう言いながら時雨は夏凛の前の席に腰を下ろしてテーブルに腕を乗せた。時雨の表情は未だ硬い。
そんな時雨をワザと無視するかのように夏凛はハルナに話し掛けた。
「ああ、そうだ！　姫、メイド服貸してくれないかなぁ」
「いいですよ」
そう言ってハルナはメイド服を取りに自分の部屋へ走って行った。夏凛は作戦ミスをしたことに気が付いた。
二人っきりになって、時雨の視線が痛いくらいに夏凛に注がれる。このまま兄弟戦争勃発になってしまうのか？
「なんで夏凛がここにいるの？」
「やだぁ～兄さま、そんなに見つめないで」
両手の平を頬に付け、顔を赤らめ叛ける夏凛。だが、それをやられた時雨はかなりキレていた。
「……怒るよ」
あからさまに話の本題を言おうとしない夏凛に時雨が小さくキレた。

「ごめんなさい、言います。私がここに来た理由」
「よろしい」
「じつは……、暗殺タイプのＡ級キリングドールに追いかけられてて」
「……で？」
　そこへいつの間にか髪の毛をツインにまとめ、メイド服を着たハルナがメイド服を二つ持って現れた。早業だ。
「あのぉ、夏凛さん、どっちがいいですか？」
夏凛は迷わず自分から見て右のピンクの生地にフリルがひらひらしてるデザインの方を選んだ。
　そのメイド服を受け取った夏凛は着替えの為に家の奥へと姿を消してしまった。
「話が終わってない」
　そう呟くと時雨は台所にお茶を入れに行った。
　ややあって時雨が台所からお茶を持って戻って来ると、ハルナは深夜ＴＶを観て楽しそうに笑っていた。
「テンチョ、これおもしろいですね、あはは」
　ハルナが観ていたＴＶ番組は『まぐろのまんま』というトーク番組で、お笑い芸人のまぐろが毎週ゲストと楽しいトークを繰り広げるという番組で、今週のゲストは今売り出し中のアイドルらしく、いつも通りまぐろはゲストの女の子を口説いていた。
　時雨はお茶をテーブルに置いて座ろうとしたのだが、彼の顔は突然何かを感じ取り、険しい表情へと変わった。

銃声と共に道路に面している窓ガラスが弾け飛び部屋中に破片が散乱する。敵襲以外のなんでもない。
「ハルナちゃん逃げるよ！」
そう言って時雨は瞬時にハルナを抱きかかえて家の奥へと走り出した。
騒ぎを駆けつけた夏凛と時雨が鉢合わせになる。
「兄さま、どうしたの!?」
「夏凛は外で敵と時間稼ぎ、ボクは村雨を取って来る」
「ＯＫ」
夏凛の返事を聞くと時雨はハルナを抱えたまま三階へと駆け上がって行った。
残された夏凛は玄関へと走り出しハルナの靴を履くと急いで道路へと飛び出した。
道路に飛び出した瞬間敵の発砲に遭い、月光照らすアスファルトの上をアクロバットで宙を舞いながら銃弾を避け敵に近づく。
敵は、夏凛を追いかけて来たキリングドールだった。
乱射される銃弾を避けているうちに弾が切れた。それを見計らって夏凛の回し蹴りがキリングドールの頭に炸裂される。
キリングドールの身体は大きく吹き飛ばされ、時雨の店のシャッターにぶち当たり破壊した。
「さすがに普通の靴で蹴ると痛ったぁ～い」
しゃがみ込み左足を押さえてうずくまる夏凛の視線の先の瓦礫の山が吹き飛んだその中から無表情のキリングドールが無傷

で現れた。
「私のメガトンキックでもダメなのぉ〜!?」
夏凛は身体の強度と重さを一瞬だけ自由に変えることのできる特殊能力を持っている。今の蹴りは、三トン程の威力があったのだが、それでも無傷のマシーンを見て夏凛は愕然としてしまった。
「さすがにこの靴じゃあれ以上の蹴りは無理」
夏凛の普段履いているブーツは有名な魔導士が製作する特注品で、特殊な素材で作られており、夏凛の蹴りに耐えられる強度と水鳥の羽根よりも軽い重さを誇っていた。いくら身体の強度を変えられるといってもそれには限界があり、いつもの靴を履いていない状態では本気を出すことはできない。
夏凛に向かって歩いてくるキリングドールの後ろ――店の奥で何かが激しく閃光を煌かせた。
「ボクの店をどうしてくれるんだ！」
妖刀村雨の代用品、妖刀殺羅を構える時雨の目は怒りで満ち溢れていた。村雨は下水の中に落として来てしまったらしい。
黒いロングコートを風になびかせながら時雨は、キリングドールへと斬りかかった。
真紅の光を放ち振り下ろされるソードからは光の粒が血の玉のように飛び散り、それを片手で受け止めようと手を出したキリングドールであったが、その行為は虚しく。出された手は腕ごと切断された。
火花を飛ばしながら血の代わりの緑色の液体を出す腕には気

にも止めず、キリングドールの蹴りが時雨のわき腹目掛けて繰り出される。
蹴りはわき腹に喰い込み、苦痛の色を浮かべる時雨であったが、ソードの柄を強く握り締め相手の首目掛けて振った。
マシーンの首が宙を舞い、地面を落ちた。虚しい金属音が夜の澄んだ空気に響き渡る——。
戦いを終え、わき腹を押さえ道路に片膝を付く時雨は辺りを見回し呟いた
「……夏凛は？」
もう、この場には夏凛の姿はどこにもなかった。夏凛いつの間にかこの場から逃げてしまっていたのだ。
夜の闇にバイクの走る音が聴こえた。夏凛が戻って来たのかとその方向を見ると大型バイクに跨った女性がこちらに向かって来るではないか!?
向かってくるというのは、〝近づいて来る〟ではない。時雨をひき殺す勢いでこちらに向かって来ているのだ。
それに気付いた時雨は間一髪のところでアスファルトの地面の上を転がり、向かって来たバイクを避けた。
時雨をひき殺すことに失敗したバイクは激しい音を立てて急ブレーキで止まると、特殊部隊のような重装備をした女性がバイクを降りて時雨に近づいて来た。
女性は明らかな殺気を放っている。だが、感情がない静かな殺気だった。このような殺気は先程のキリングドールからも感じられた。つまり……。

「また、キリングドールか……はぁ」
妖刀を構え立ち上がる時雨であったが、腹に痛みを覚え顔しかめる。だが、キリングドールには相手の事情など構うわけもない。
瞬時に抜かれた銃から九ミリの銃弾が秒速三〇〇キロメートルの速さで発射された。時雨との距離は一〇メートルを切っている。だが、時雨はそれを防いだ。
まさに目にも止まらぬ速さで時雨は剣を振るい、銃弾を叩き斬り消滅させた。人間の技とは思えぬ神の成せる業であった。
銃弾を叩き斬った時雨の身体はわなわなと震えていた。
「この妖刀はボクの手には余るな……ボクの身体の限界以上の力を引き出してくれる……」
限界以上の力を引き出す。それは身体に過度の負担をかけることを意味していた。
再び銃弾を発射される前に時雨は相手の銃を構える手を腕ごと切断しようとした。だが、相手は並の人間ではなかった、キリングドールだった。腕は瞬時に引かれて腕を切断することはできなかった。だが銃は切断できた。
目的の根本を達成した時雨は敵に背を向けて走り出した。つまり逃げたのだ。
自分の店を構えている商店街を黒いロングコートをなびかせながら走り抜ける。時雨はこの商店街で騒ぎを起こしたら追い出され店の営業ができなくなると考えたのだ。
キリングドールは時雨の真後ろを走っている。もう少しで手

が届いてしまう距離だ。そして手が伸ばされた。
　それに気付いた時雨は回転しながら妖刀を振るった。キリングドールは後ろに飛び退き間一髪のところでそれを避けた。
「惜しかった、もう少しで斬れたのに……でも、ここなら思う存分に戦えるかも？」
　ここは商店街を抜けた先にある神威神社。変わったしゃべり方をする美人の巫女がいることで有名な神社だ。
「ここの境内広いから……少しくらい暴れても平気だよね？」
　気兼ねをする時雨だが、キリングドールは命令以外のことに構いもしない。
　襲い掛かってくるキリングドールを交わし、時雨は相手の股から頭上にかけて一刀両断を試みたが、キリングドールは状態をひねり腕でそれを受けた。もちろん一刀を受けた腕は斬り飛ばされた。
　斬り飛ばされた腕は遠くまで飛び、しめ縄の架けられた御神木の横を掠めるようにして落ちた。
　冷や汗を一滴流し、顔を蒼くした時雨の身体は固まってしまっている。そこにすぐさま巫女装束を着た人物が現れた。命だ。
「神社で暴れるなど不届き千番。時雨、わらわの寝起きが悪いことはお主も知っておろう？　説教は後でしてやるので覚悟せいよ。じゃがな、今は人の形をしたまがい物を滅するのが先じゃ」
　固まり何も言えない時雨を無視して命は空に印を描く。
「汝らは全てを滅する力なり、〝招〟！」

命は右手の中指と人差し指で空を突き刺した。すると、空間が裂け、中から二人の鬼神が現れた。
おぞましい怒りの形相をしている赤色の肌を持つ鬼神は、二体同時に手に持っていた鞘から剛剣を抜き、キリングドールに襲い掛かった。
鬼神を敵と判断したキリングドールは鬼神を倒すべく挑むが力の差は明らかだった。キリングドールは三〇秒もしないうちに残骸と化してスクラップにされていた。
命の視線が時雨に向けられた。
「さて、時雨よ。言い訳は聞くがの、仕置きは覚悟せいよ」
「あのね……夏凛がキリングドールに追いかけられてさ……それでボクにそいつを押し付けて……」
「だからと言うて、この神社に逃げ込む理由はかるのかえ？」
「そ、それは商店街で暴れると商店街を追い出されて営業が……」
「ふむ、時雨の言うことはわかった。じゃがな、わらわの怒りを買うことになるとは考えなかったのかえ？」
「…………」
言葉が詰まり無言になった時雨を見た後、命は二人の鬼神を見てこう言った
「仕置きをしてやれ」
二人の鬼神は時雨の腕を掴み羽交い絞めにした。そして、命はもう用は済んだと帰ろうとした。
「ま、待ってよ命！！」

77　トラブルシューター夏凛（♂）

「わらわはもう寝る」
命は時雨の顔を見ずにさっさと帰ってしまった。
残された時雨は一人の鬼神に抱きかかえられ、もう一人の鬼神は鞘を握り締め構えた。時雨のお尻は鞘を構えた鬼神に向けられていた。まさか……!?
この日の夜中、静かな境内から男の悲痛な叫び声が聴こえたのは言うまでも無い。その声は商店街まで響き、何事かと家から飛び出して来た近隣住民は二人の鬼神を見て腰を抜かし大騒ぎをしたという。

第8章　魔導ショップ

盗んだバイクで走り出し、自宅マンションへと服と武器を取りに帰った夏凛であったが、自宅マンションはすでに帝都警察と報道陣、そして野次馬でごった返していた。
夏凛の部屋は完全封鎖され、その部屋のベランダの下に当たるコンクリートの路面には直径五メートル深さ三メートルの穴が空いていて、恐らくキリングドールがベランダから夏凛を追いかけて飛び降りた際に空いてしまった穴に違いない。
遠くから集まる人々を見て考え込む夏凛——。そして、いいアイデアが頭に浮かんだ。
「なんだ、マナちゃんのとこ行こ」
再度、盗んだバイクで走り出そうとした時、後ろから何者かに声を掛けられた。
冷っとしながら後ろを振り向くとそこには警官が立っていた。
「あの、夏凛さんですよね」
「ち、違いますわ、おほほほ……」
顔を両手で覆い無駄とも言える行動をする夏凛に対し、警官は尚も詰め寄り顔を覗き込むように言う。
「あなたの部屋が何者かに荒らされた形跡があるのですが、何かご存知ありませんか？」
「だ、だから、人違いですわ」
「嘘付かないで下さい」

「あら、もう家に帰らないとお父様に叱られてしまいますわ。じゃ、さよならぁ～」

夏凛はバイクのアクセルを全開にして逃げようとしたが、警官がそれに気付き夏凛の身体に飛び掛かったが敢え無くバイクは逃走し、警官は鈍い音を立てながらコンクリートの地面に腹から落ちた。

それを見ていた夏凛は小さく呟く。

「……痛そ」

深夜の街を信じられない猛スピードでバイクを走らせる。ノーヘルなので漆黒の長い髪の毛がなびき、夜の闇と溶け合う。

後ろから、喧しいサイレンの音を立てながら追いかけてくる一台の車。

そんな物など気にも止めず、バイクをどんどん加速させていく夏凛。しかし、帝都警察の誇る最新鋭パトカーの性能はそこらの車とは比べ物にならない高性能車だった。

帝都警察の誇る最新鋭高性能パトカー『ＴＫ−００９Ｈ』は一台一〇〇億円以上するという馬鹿高い値段の車で、都民のバッシングを受けているという代物だ。

銀色に輝くそのボディーはイルカを思わせる滑らかな曲線を描き、さながらそれは車というより戦闘機の機体に似ている。そして、そのボディーはあらゆる攻撃でも傷一つ付けることができないと言われていて、実験で行った核爆弾攻撃にもびくともしなかったらしい。スピードもマッハ一まで出せるらしいが、そんなスピードを帝都の街で出せば直ぐにビルに突っ込み大惨

事を引き起こすことは目に見えている、無意味としか言えない機能だ。
　そんな車からたかが改造バイクが逃げ切れる筈もなく、直ぐに追いつかれてしまった。
　バイクの横に車体を寄せるパトカー。この時の時速はすでに三〇〇キロオーバーしていた。どちらも少しでもバランスを崩せばハンドルを取られて大事故を起こすスピードだ。
　パトカーに取り付けられたスピーカーから発せられる声。
《直ちにバイクを停車させなさい！！》
その警告を聞いた夏凛は、パトカーの車体に顔を向け微笑を浮かべた。
　次の瞬間、夏凛の姿がバイクの上から消えていた。猛スピードのバイクはバランスを崩すことなく走り続けていたが、突然大きくバランスを崩し横転してビルの一角に突っ込み爆発を起こした。
　急ブレーキで地面にタイヤの跡をありありと残しパトカーは止まるが、夏凛の姿はどこにもない。
　パトカーから警官二人が降りてきて辺りを見回すが、やはり夏凛の姿はなかった。もし、あのスピードで落ちたのであったとしても、もう遥か後ろのことだ。
　警官二人はパトカーに乗り込むと元来た道を逆走した――。
　夏凛は道路の上を全力で走り、パトカーを巻いてやったことに満足し悪戯な笑みを浮かべていた。
「うまくいって良かったぁ」

夏凛はあの時バイクから飛び降りた。飛び降りたと言っても普通に飛び降りたわけではないのは当然なのだが、どのようにして飛び降りたかというと、まず夏凛は両手を離し、身体の重さを限りなくゼロにした。後は風圧に身体を任せながら後ろに吹き飛ばされただけ、それだけだった。

高速で走る車からは夏凛の姿が突然消えたように見えたかもしれないが、それは車が高速で走っていた為だ。時速三〇〇キロメートルで走っている乗り物は一秒間に八〇メートル以上も進む。

月の光を浴びながらアスファルトの上を駆け抜ける夏凛の行き先とは――。

走り続けた夏凛は程なくして、とある一軒の魔導ショップに辿り着いた。

看板などはない、ただそこにあるのは莫迦デカイ洋館だけだ。だが、この街で魔導に関する者であるならば誰もが知っている店である。

ツルの生い茂った鉄格子の門を潜るとそこには、白い女神の石像の置いてある噴水に出る。この噴水の水は聖水であり、魔物や悪魔などの類をこの一帯に寄せ付けない魔除けの力を持つ。夏凛はこの噴水の横を通る時、いつも何故か気分が悪くなる。

早々に噴水の横を抜けた夏凛は洋館の玄関に立ち、ドアを強くノックした。

「マナちゃんいるぅ〜？」

しばらく待ったが返事がない。

この洋館の主人は海外に出かけることが多く、家を空けることが多い。今も外出中なのかもしれない。
ややあって、扉が軋む音を立てながら開き、中から蝋燭を手に持った小柄な少女が現れた。
少女はゴシック調の黒いドレスに身を包み、長く美しい金髪の髪を腰まで垂らし、蒼く透き通る瞳を上目遣いにしながら夏凛をまじまじと見つめていた。
「夏凛様、深夜遅くの御訪問。何事でしょうか？」
「こんばんわアリスちゃん」
機械人形アリス――。機械仕掛けである彼女は自称超美人天才魔導士マナの自宅である洋館に住み込んでいるメイドのような存在で、以前はマナの命を狙っていたこともあったが、今ではマナと和解しマナの身の回りの世話やマナが不在の時のお店の管理などを任されている。
「御話は中でお伺い致します。どうぞ中へ御上がり下さい」
胸に手を当て軽く会釈をしながらアリスはもう片方の手で夏凛を洋館の中へと招き入れた。
家の中は暗い、明かりは何も灯っていない。玄関ホールは天井が高く、目の前には上る所が二つ双方にある階段が交差しながら二階へと伸びている。下を見ると華をモチーフにした昏い色のじゅうたんが敷き詰められている。
「こちらへどうぞ」
アリスはそう言って長い廊下を歩き出した。その後を夏凛は無言で付いて行く。

しばらく歩き案内された部屋の中で夏凛はソファーに座らせれて待たされた

ぼーっとしながら天井を仰ぎ夏凛が待っていると、そこにトレイにティーカップを乗せたアリスが現れた。

「御菓子は切らしてしまって申し訳御座いませんが、どうぞ、こちらだけでもお召し上がり下さい」

透き通るように白く小さな手から、紅茶の入ったティーカップが夏凛のしなやかな手へと手渡された。

「ありがと」

手渡された紅茶をひと口飲んだ夏凛は、ひと息付き肩の力を抜いた。そんな夏凛を透き通る蒼い瞳が覗き込む。

「夏凛様、今日の御訪問は何用で御座いましょうか？」

「マナちゃん居るぅ？」

「申し訳御座いません、先ほどマスターの所在を確かめようと御屋敷中を隈なく探したのですが、どうやら御出かけになられたようで御座います。壱時間程前には確かに御見かけ致したのですが……？」

「じゃあいいや」

「申し訳御座いません」

深々と頭を下げるアリスに恐縮してしまう夏凛。

「別にアリスちゃんが謝らなくてもいいよ。居ないなら別にいいの、今日は私のセット一式が欲しかっただけだから」

「セット一式を御求めで御座いましょうか？」

「うん、上下一式とブーツと大鎌と、それから香水も忘れない

でね」
「承りました」
そう言うとアリスは会釈をして闇の奥へと消えて行った。
しばらくして、ティーカップに入った紅茶があんくなった頃、
たくさんの荷持つを抱えたアリスが音もなく姿を現した。
「大変御待たせ致しました」
そう言ながら、アリスは荷物をテーブルの上に順々に広げて
置いていった。
テーブルの上に広げられたゴスロリのドレスを手に取り説明
をはじめるアリス。
「こちらが新作のドレスで御座います。このドレスはマスター
が」
「あ、あの説明はいいから」
「そうで御座いますか？」
夏凛はテーブルの上に置かれたブーツを手に取り、アリスの
手からドレスを奪うと、
「着替えてくるから」
と言って別の部屋に駆け出した。
「あの御着替え御手伝い致しましょうか？」
「来ないでいいから」
アリスの申し出を力強く断った夏凛はそそくさと別の部屋に
移動して着替えをした。
アリスが待っていると、漆黒のドレスに身を包んだ夏凛が軽
やかなステップと共に現れた。

「とても御似合いで御座います夏凛様」
そう言いながらアリスは、夏凛に大鎌を手渡した。
この大鎌は魔導士マナの作り出した特注品でマナ自身もこの鎌を愛用していて、夏凛と同じように普段は異空間に何本ものストックを置いてある。
大鎌を構えた夏凛の姿はとても美しい死神を連想させた。この死神にであれば魂を狩られても良いと思う者が何人もいるであろう、そういった感じの妖艶さと美しさを身に纏う容貌だっだ。
「まあ、夏凛様、素敵で御座います」
機械人形であるアリスが声を荒げて絶賛するのを聞いて照れ笑いを浮かべる夏凛。
「ありがとぉ、代金は私の口座から引いて置いてね」
「承りました」
「え〜と、あと。タクシー呼んで貰えるかなぁ」
「承りました」
「えっと、あともう一つ」
「何で御座いましょうか？」
夏凛はさっきまで着ていたメイド服と靴をアリスに手渡した。
「あの、これ、ハルナちゃんに返しておいてくれるぅ？」
「承りました。責任を持って私が返しておきます」
「ありがとぉ〜」
「タクシーが来るまでしばらく御待ちになっていて下さいませ」

そう言ってアリスは空のティーカップをトレイに乗せて、また暗い闇の中へと姿を消して行った――。

タクシーが屋敷の前へと到着し車を止めると、鉄格子の重い扉が音を立てながら開けられ、中からアリス、その後ろから夏凛が出てきた。

「夏凛様、またの御訪問を――」

「じゃあね」

会釈をするアリスに軽く手を振ると夏凛は開けられたタクシーのドアから中へと乗り込み行き先を告げた。

「マモンカンパニーまでよろしく」

タクシー運転手は無言でタクシーを走らせた。

空はすでに東の空の方から、徐々に光が世界を照らしつつある。タクシーはその光に向かって走って行く。

アリスは小さく消えて行くタクシーに会釈をすると屋敷へと足を運ばせた。

まだ光の照らされない、噴水広場を明かり無しで無駄な動き一つせず抜けると、アリスは玄関を開け屋敷の中へと入り、足早にある部屋に向かった。

屋敷の中は暗く、足元、ましてや長い廊下の先などは全く見通すことができない。しかし、アリスはその中を淡々と歩いて行く。

そして、ある扉の前で足を止めると、ドアを二回ノックした。

「どうぞ、お入り」

中からの返事を待ってアリスは扉を開けた。
部屋の中にはテーブルに片肘を付き、長い足を組みながら椅子に座り、紅茶を飲んでいる長く銀色に輝く髪を持った男がいた。
その男は煌びやかな装飾の施された法衣に身を包み、その顔は神々しいまでの美しさを放ち、全身を何か強大な力によって包まれているようだった。
アリスはその人物に軽く会釈をした。
「夏凛様が御帰りになられました」
「どこに行くか聞いたかい？」
「マモンカンパニーに行くとおっしゃって御座いました」
「やはり絵画はそこにあるのか。そんなことより、クッキーが切れてしまったんだけど」
無表情な顔に付いている二つの澄んだ蒼い目が男を無言で見つめる。
「………………」
「なんだい、何か言いたいのかい？」
「御菓子は、もうファウスト様が全て御召し上がりになられて、この屋敷にはクッキー一枚たりとも残っておりませんが」
「そんなに食べたかい、私は？」
「ええ、クッキーは一〇〇〇枚以上、ケーキは三〇〇個ほど、紅茶も四〇〇杯ほど御代わりになられました」
「そんなに食べたかねぇ～、いろいろなものを身体の中に養っていてね、仕様がない。さて、御菓子がないのなら出かけると

するか」
「そうして頂けると助かります、愚痴や言い訳を聞かなくて済みますので」
　飲み干したティーカップをテーブルの上の置くとファウストは勢いよく立ち上がった。
「ところでアリス、マナの姿が先程から消えてしまったんだが？」
「マスターはどこかに御出かけになられたようで御座います。きっとファウスト様のことが……いえ、何でも御座いません」
「そうかい、ありがとう。マナには今度会った時に御説教を聞かせてあげよう」
そう言って、ファウストは悪戯な笑みを浮かべた。

第９章　光臨

タクシーに乗ること、約三〇分――夏凛はマモンカンパニーのビルの前でタクシーから降りた。
夜明けが来た。東の空には燃えるような太陽が顔を出し、今日も猛暑になるに違いないと予感させていた。
朝方でより一層冷やされた海風が吹く中、ビルを見上げ、どうやって中に侵入するかを思案していた夏凛の目線がビルの入り口へと向けられた。
開かれた自動ドアの中から、マモンカンパニー社長ゲイツの秘書である女性がひとりで現れた。
秘書は髪の毛を海風になびかせながら、長くスラリと伸びた足を短いスカートから覗かせながら、モデル歩きで夏凛の目の前まで来た。
「社長がお待ちです」
「えっ!?」
「ご案内いたしますので付いて来て下さい」
夏凛は無言で歩き出す秘書の後を追いかけるように付いて行き、ビルの中へと入った。
ビルの中は電気が点けられてはいるが、ひと気はなく静寂に包まれている。
足音が響く中、玄関ロビーを抜けエレベーターへ二人が乗り込むと秘書は十三階へのボタンを押した。

無言の時間が過ぎ、エレベーターのドアが開かれるとその中からまず夏凛が、その後に秘書が降りて来た。
「どうぞ、こちらです」
秘書はまた歩き始める。そして、社長室の前まで来るとノックもせずドアを開けた。
社長室には誰も居ない。
「また、罠じゃないよね」
そう言う夏凛を無視して秘書は壁に隠されていたボタンを押した。すると、デスクの後ろの壁が真ん中から左右に開かれ中からエレベーターが現れた。全てを収納し隠すこの部屋は隠しエレベーターまでも隠していたのだ。
秘書は現れたエレベーターに片手を向けた。
「社長がお待ちです」
「ありがとう」
夏凛はエレベーターの中に乗り込んだ。エレベーターには下か上に行くどちらかに行くボタンしかなかった。
下へのボタンが押され、閉まるドアへ秘書が軽く会釈をした。
「お気を付けて」
エレベーターは下へとどんどん降って行く。そして、ドアは開かれた。
部屋は静寂に包まれ、コンクリートで作られた壁は強いライトで照らされ、床には魔方陣が描かれている。
「やあ夏凛くん、また会ったね」
暗がりの中からマモンカンパニー社長ゲイツが手を軽く上げ

ながら現れた。
　夏凛は辺りの気配を探ったが、今ここにいるのは自分と目の前で不敵な笑みを浮かべる少年だけらしい。
「絵画はどこにあるの？」
「ほら、あそこに見えるだろう」
　ゲイツの指し示す指の先は美しい天使の描かれた絵画が壁に飾られていた。
　その絵は美し過ぎる、人間が到底描ける絵ではない。中性的な面持ちの天使が薄での白い布で身体を包み優しい微笑を浮かべている。その瞳は全てを見透かすように夏凛を見ていた。
「あれは天使の絵なんかじゃない。悪魔の絵だ」
　薄ら笑いを浮かべながらゲイツはそう言い放った。
「なら、あの絵から出すわけにはいかなぁ〜」
「それは残念だ。もう解呪は最終段階に入ってしまった」
「何だって!?　ファウストの術を破ることができるの？」
　ヨハン・ファウストは帝都政府のお抱え大魔導士で、その実力は世界一と言われている。そして、絵画に厳重な封印を施し堕天使である悪魔がこの世界に出て来られないようにした人物でもある
「転生の魔導士ファウストがあの絵画に封印を施したのがざっと六〇〇年前、まだまだ彼の術は未熟だったんだよ」
「それでもファウストの術を破るなんてできっこないよ」
「そうでもない、この帝都にはそんなヤツはごろごろいるよ。僕もその一人だ」

「!?」
夏凛の表情が強張った。それを見たゲイツは楽しそうに笑う。
「ククッ、そんなに驚くこともないさ。これでも大学では紅葉教授の元、魔導学の勉強をしていたんだ」
魔導学とはルーン・カバラ・錬金術などありとあらゆる魔法や魔術を研究する学問である。
ゲイツはスーツのポケットから小さな刃渡り一〇センチほどのナイフを取り出し見せた。
「このナイフが何だかわかるかい？」
「さあね」
ゲイツの取り出したナイフの刃は何とも形容できない不可解な曲線を描き、その刃には象形文字のような神秘的な文様が刻まれていた。
そのナイフが不思議な光を放つ。不思議な光、それ以外に形容しがたい光を見ているだけで、頭が真っ白になり催眠術にかかってしまったようになってしまう。
「このナイフは僕が錬金術とルーン、それに梵字も少し使って創り出した解呪刀だよ」
「解呪刀？」
「もう、すでに絵画にかけられていた何十もの封印は解いた。後はこのナイフで最後のもっとも強力な封印を切り裂いてやればいい」
そう言ってゲイツは絵画へと歩み出した。
「そうはさせないよ」

新品の鋭い光を放つ大鎌を異空間から取り出した夏凛はコンクリートの地面を激しく蹴り上げゲイツに後ろから襲い掛かった。
大鎌が小さな少年を後ろから切り裂こうとしたその時、少年は悪寒の走るような狂気の目をしながら振り向き、大鎌を片手で受け止めた。
「有り得ない！！」
「ククッ……くははははっ。有り得ないだって？　それはおもしろい！！」
大鎌を握る手の間からはまだ酸化していない黒い鮮血が滲み、そこから滴り落ちる血は床を紅く染めて行った。
大鎌を握る手に力が込められた。そして、大鎌は大きく振り飛ばされ夏凛の身体ごと宙を舞い、五メートルもの距離を飛ばされた。
夏凛は鎌をしっかりと構えながらしゃがみ込むようにして着地した。飛ばされても戦闘態勢は決して崩さない。
「子供だと思って甘く見くびっていた私が莫迦だった」
その声は先程との夏凛とは別の者の声のようであった。冷たく鋭い声は空気を冷やし凍らせた。
「そうだ、僕はただの子供じゃない」
そう言ったゲイツの身体の突然異変が生じた。ゲイツ少年の顔がもの凄いスピードで毛に覆われていく。そして、身体は二倍三倍へと膨れ上がり、着ていたスーツをびりびりと破き、その下から現れた肌も毛で覆われていた。

　夏凛の前で変身を遂げたゲイツ少年は、先程とは別人、いや、人とも違うものに変身していた。巨大な身体全身を墨汁を紙に零したような色の毛で覆い、髪はライオンの鬣のように波打ち、そこから突き出た尖った耳は忙しなく動き、血のように紅く鋭い目は夏凛を凝視し放さない。
　毛に覆われた口が大きく開かれ鋭い牙を見せると中からくぐもった声が発せられた。
「僕の実験の成果はどうだい？」
「狼男!?　自らの身体を実験に使い、キメラになったわけか」
　ゲイツは自らの身体に狼との融合手術を施していたのだ。
　狼男となったゲイツの五感は研ぎ済ませれ、筋力も人間の比ではない。
　狼男は手に持っていたナイフを地面に放り投げると、両手を地面に付き五メートルもの距離を助走無しに跳躍し夏凛に襲い掛かった。
　猪突猛進の狼男に夏凛の大鎌がその鋭い刃を向け切り裂こうとしたその刹那、狼男の姿が夏凛の視界から消えた。
「莫迦な、空中で体勢を変えるなんて……」
「それができるんだ」
　鈍い音と共に夏凛は背中に激痛を覚え、次の瞬間には宙を飛び、地面を転がり回ってしまってした。
「……ぐはっ」
　咳き込んだと同時に夏凛の口から生暖かい血が吐き出され、手のひらを真っ赤に染めた。

「頭の悪いヤツだ、僕は魔導を勉強していたと言っただろ。この位の事できて当然、君も魔導士の端くれならわかってもいいと思うけどな」
『魔導士の端くれ？』　夏凛が魔導士の端くれとはどういうことなのだろうか？
「魔導士の端くれだって？　私は清掃員兼トラブルシューターだ」
「君がファウストの弟子であり、そのファウストに施された君の特異体質についても調べがついてるよ」
床に膝を突く夏凛の目つきが変わり、狼男を鋭い目で睨んだ。
「私は好きでこんな身体になったわけじゃない。ファウストが勝手にしたことだ」
「しかし、その体質が大いに仕事に役立ってるじゃないか。僕が知ってる君の能力は身体の重さや強度を変えるものだけだけど、他にもあるんだろう、おもしろい能力が？」
「あまりその話については触れられたくないな」
そう言うと夏凛は素早く移動し狼男の視界からその姿を消した。
「僕の超感覚を見くびってもらっては困る」
狼男の腕が大きく横に振られ何かにぶつかった。
「くっ……」
そこには狼男の腕を鎌の枝で受け止めた夏凛の姿があった。
「まだまだだね」
口から鋭い牙を覗かせながら笑うと、狼男は残りの腕を大き

く振りかぶり夏凛の顔面へと強烈な一撃を喰らわした。
痛烈な一撃を喰らった夏凛の身体はその勢いで飛ばされたが、彼は決して大鎌を手放すことはなかった。
顔を押さえうずくまる夏凛。しかし、手で覆われた顔から覗く口元は微かに笑っていた。
「俺様の顔を殴るなんざ、いい度胸してじゃねぇかテメェッ！！」
夏凛はコンクリートの地面を砕く勢いで地面を蹴り上げ、大鎌を大きく振り上げながら狼男に襲い掛かった。
「それが君の本性か……何っ!?」
狼男の表情が曇る。夏凛が視界から消えたのだ、しかも先程とは違い、狼男の超感覚を持ってしても夏凛の位置を特定することができない。
「どこだ、どこに消えた！！」
声を荒げ大声を上げる狼男の目の前に大鎌を優雅に構える死神が現れた。
「俺様をナメるんじゃゃねぇぞ、このクソガキがっ！！」
突如現れた死神によって狼男の胸は大きく切り裂かれ、傷口から黒血が噴出し、不敵な笑みを浮かべる死神の顔を真っ赤に染め上げた。
「ぐおぉぉぉっっっ！！」
咆哮を上げる狼男の胸を再度死神の大鎌が切り裂いた。クロスされた傷口から大量の血を噴出しながら、狼男はそのまま後ろに引っ張られるようにしてバタンと勢いよく音を立てながら

倒れた。
「俺様の顔を殴ってこれくらいで済んだことに感謝しろ」
そう言って夏凛は大鎌を大きく天上高く振り上げると、口の端を吊り上げ鼻で笑うと大鎌を狼男の胸へ振り下ろし突き刺した。
狼男の身体がビクンと一瞬振るえ、そのまま動かなくなった。
凍り付いたような表情を浮かべた夏凛は大鎌を狼男の胸に突き刺したまま手を放すと、急に後ずさりするようにその場から離れた。
「な～んちゃって」
夏凛は苦笑いを浮かべながら、強張った表情でそう言った。
『な～んちゃって』とは何に対しての言葉なのだろうか？
「さ、さてと、そうだ絵画は、あ、あ、そ、それよりもさっきのナイフをどうにかしないとダメかなぁ～」
夏凛は明らかに動揺していた。先程の『な～んちゃって』は狼男を倒した時の自分の言動及び態度に対するものだった。
「ナイフ、ナイフはどこかなぁ～？」
部屋中を隈なく探すがナイフはどこにも見当たらない。
「どこいっちゃたのかなぁ～」
「ククク…………探し…物はこ…れだろ……」
声のした方を振り向くとそこには、ナイフを持った丸裸のゲイツ少年が血まみれになって絵画の横に立っていた。
「しつこい子は嫌われるよぉ～」
「あ…れくらい…の攻撃…で死んだ…らつまら…ないだろ」

行き絶え絶えなゲイツ少年は吐血しながら、立っているのもやっとという感じだった。その少年がせせら笑った。
「ファ…イナ…ルス…テージだ！！」
ゲイツ少年は絵画の前に立ちナイフを両手でしっかり握ると思いっきり力を込めて絵画に突き刺した。正確にはナイフは絵画には突き刺さっていない、ナイフは絵画とほんの数ミリのところで止まっていた。ナイフは絵画を守るようにして張られている〝何か〟に突き立てられたのだ。
「ふ…ふはははははっ！！」
高らかに笑うゲイツ少年はナイフを勢いよく下へ下ろし〝何か〟を完全に切り裂いた。
切り裂かれた空間の亀裂から光が零れ、そして、光は堤防を流れ壊すように一気に放射され、両手を広げて高らかに笑うゲイツ少年の身体を丸々包み込み跡形もなく消滅させた。
あまりの凄まじい閃光に腕で顔を覆う夏凛。そして、腕をゆっくりと下ろす彼は見た。光の中から神々しいまでの重圧感を放ちながら、一歩、また一歩とこの世界に姿を現した堕天使の姿を――。
絵画の中から飛び出した幻想世界の住人の姿は、この世界に住む生物の何よりも美しい。身体を作る美しいライン、白く輝く大きな鳥のような翼、極めが細かく透き通るような白い肌、太陽そのもののような金髪の長い巻き毛、そして妖艶で中性的な面持ちの顔。まさにこの世のものとは思えないとは、この者の為にあるかのようだ。

圧倒的な力の差が空気を伝って、苦しい程に伝わって来る。
その姿に愕然とした夏凛は言葉を失い、魂が抜けてしまったように、ただそこに立ち尽くしてしまった。
絵画から現れた堕天使は、全てを見透かすような瞳で夏凛を〝視た〟。
「私の同族の血が混ざっているようだな」
そうはっきりと堕天使は夏凛に向かって言った。同族とはどのようなことなのであろうか？
堕天使の口の端が釣り上がり、柔らかな唇を舌がペロリと濡らした。そして、顔の骨格的には決して有り得ることのないほどの大口を空けると、堕天使は自分の出てきた絵画を一思いに丸呑みにした。
ことを終えた堕天使は春のような微笑を浮かべて夏凛を見た。
一部始終を見ていた夏凛は唖然とし、寒気と悪寒が身体を駆け巡り、顔は見る見るうちに蒼ざめていった。
「奇麗で何よりも美しいけど、生理的に嫌な感じがするぅ〜」
部屋が突如神々しい閃光に包まれ太陽の下のような明るさになった。光を発しているのは堕天使だった。
建物全体が音を立てながら小刻みに連続して大きく揺れ、壁にヒビが入り、天上から砂埃と砕けたコンクリートの破片が落ちてくる。何か――恐らく堕天使の力によって建物が崩壊し始めているのだ。
「……ククク、クハハハハハ」
突然笑い始めた堕天使は翼と両手を羽ばたくように大きく広

げた。それと同時に堕天使の身体から七色の輝くオーラのような物体がいくつも流れるように飛び出し、それは哀しい表情をした顔のような形を持ち叫び声を上げ、部屋の中を駆け巡り、壁を突き破り、天井を突き破り飛翔する。

「魂の解放。人間の魂は死をもって浄化され真の自由を持つ光の領域へと上り詰め、大地に束縛されることなく神に取って代わる。私はその偉大な指導者となるのだ」

堕天使の美しい横顔が上を見上げた。建物は激しく揺れ立っているのもままならなくなった。コンクリートの塊が天井から落ち床に当たり四方に砕け散け、建物が崩壊してしまうのも時間の問題と思われる。

大きな翼を激しく一度羽ばたかせ爆風を起こすと共に堕天使の身体が宙に浮いた。そして、堕天使は天高く舞い上がろうとした。

空かさず夏凛は堕天使を逃がさまいと堕天使の足首を掴むが、堕天使はそのことには気にも止めず夏凛ごと天高く飛翔した。

天井は堕天使から発せられるオーラで身体に触れることなく砕かれ、天への道を開く。

夏凛は決して堕天使の足を放さず、堕天使と共に天へと上がった。

第１０章　悪魔の取引

モマンカンパニービルから天へと光の筋が昇って行くのが見えた。
「おもしろいことになっているようだな」
輝く銀色の長髪を風圧になびかせながら、煌びやかな法衣に身を包んだ長身の男は、そう楽しそうに言った。
この光景をビルの近くから見ていた男はファウストだった。
ビルの上空まで上がった堕天使は身体を大きく広げ力を解き放った。見えない力の風によって夏凛の身体は大きく飛ばされてしまった。
上空五〇メートルの高さから落下し、ビルからだいぶ離れた所に軽やかに着地した。
夏凛はあからさまに嫌な表情をした。
「なんで師匠がいるの？」
夏凛の視線の先にはファウストが微笑を浮かべ立っていた。
「仕事に来ただけだよ」
「帝都政府のエージェントは師匠意外に何人動いてる？」
「私だけだ。この兼に関しては、処理できる人物は私しかいないからな」
自信満々の笑みを浮かべるファウストに対して、夏凛は上空にいる堕天使をビシッと指を差し言った。
「じゃあ早くやっつけちゃってよぉ～」

「私とて奴を倒すのは無理だ、絵画自体を封印するのが限度だな」
「じゃあ早く封印してよ」
「ふっ、今言っただろ『絵画自体を封印するのが限度』だと。外に出た奴の力はオリジナルに匹敵する、まさに破壊の神だ。私にできることは絵画の中でおとなしくしてる奴を封印するだけだ」
「はぁ！！　んだと、このインチキ魔導士、一〇〇〇以上生きてるクソジジィが！！」
夏凛の態度が急に急変した。それを見たファウストはニッコリと笑った。
「それでこそ夏凛だ、そちらの方が君らしい。それに私に向かって『クソジジィ』は失礼だぞ、これでも身体と心は二〇代のままだ、ふっ、出来の悪い弟子にはお仕置きをしなくてはな……」
そう言うとファウストはどこからか杖を取り出し天に掲げた。杖の先端に取り付けられた蒼い魔玉が煌めいた。その瞬間夏凛の身体が地面に吸いつけられるように引き寄せられ、腹ばいの状態で地面に身体を強く叩きつけられた。
「ぐっ……何すんだジジィ！」
冷ややかな目でファウストは夏凛のことを見下すように見た。
「君の身体に悪魔との融合手術を施したのは私だ。その際に行った魔術によって君の身体は決して私には刃向かえない」
「ざけんなっ！　俺様はそんなことして欲しいなんて頼んでね

ぇよ、性格歪んでるぞテメェ！！」その言い草はなんだ」
「そんな素晴らしい身体を与えて貰っていて、その言い草はなんだ」
「気に入るかこんな身体！　早く俺様の身体を〝女〟に戻しやがれっ！！」
　衝撃の告白だった。夏凛はなんと元女だったのだ。
「君のその言動、その性格にはその身体の方がお似合いだ」
「クソっ！！」
　夏凛は身体を動かそうとするが、全く動かない。
「夏凛はそこで頭を冷やしていろ」
ファウストはそう言うと全神経を集中させ、レビテーションと呼ばれる空中浮遊の術を使い空へと舞い上がった――。
　その場に残された夏凛は憤怒の念が身体に底からふつふつと煮えたぎるようにして全身を沸騰させた。
「俺様はファウストの弟子でもなけりゃー、魔導士でもない、ただの被害者だっ！！」
　夏凛は確かにファウストの弟子でもなければ、魔導士でもなかった。
　夏凛には当時小さかった頃、仲の良かった近所のマナお姉さんという人がいた。そのマナお姉さんは魔導士の卵でファウストの元で修業をしていたのだった。マナお姉さんと仲の良かった夏凛はファウストの元へ遊びに行くことが多く、ある日のこと、事件を起こし夏凛とマナお姉さんはファウストの怒りを買い、罰としてある魔法実験の実験台にされたのだった。そして、

夏凛は悪魔との合成手術をされ、色々な特殊能力と、それに加えて男の身体を与えられたのだった――。
「あれから一〇年近く経つけど、いつか絶対復讐してやる！」
だが今の夏凛は動くことすらできなかった。
ファウストは堕天使に戦いを挑む。
「人間風情が私に刃向かうだと？　おもしろい」
堕天使の身体から無数の顔を持った光が叫び声を上げ、まるでミサイルのようにファウスト目掛けて飛んで行く。
「ふっ、人間風情だと？　私はヨハン・ファウストだ！！」
大声で叫んだファウストは身体全身から光のオーラが揺らめく風のように発され、空間を歪め堕天使の放った光を全て消滅させた。
「ほほう、人間にしてはなかなかだ」
「お褒めの言葉有り難う」
冷ややかに言うファウストの身体から白い煙のようなものが立ち上がり形を作り出していく。
煙は徐々に美しい女性へと形作っていく――。腕の代わりに生えた巨大な翼、その姿はまるで伝説に語られる半人半鳥の美しい歌声を持つと言われる海の魔女セイレーンに似ていた。
半透明に輝き揺らめく美しい女性は、甘える仔猫のようにファウストに擦り寄った。
「私の持ち霊のザイン、意味は剣と装甲。私の恋人だ」
「精霊を身体の中に封じて置いたのか」
精霊は声にならない音を発した。音の波が空間に歪ませ壁の

ように堕天使に押し寄せ潰そうとする。

音の壁は円筒形の筒のように堕天使を取り囲んでいる。その壁に押し潰されまいと両手を広げ、力を込める堕天使に精霊は翼を大きくはためかせ、剣のような羽根を何百本発射した

鋭い剣のような羽根は空気を切り裂きながら、音の壁を突き破り硝子が粉々になるように砕け散り、そして羽根は堕天使の身に突き刺さる。

堕天使は慈愛の笑みを浮かべていた。その身体には無数の羽根が突き刺さり剣山のようになってしまっていて、さながらそれは拷問のようである。しかし、血は一滴も流されていない、それどころではない、羽根はなんと堕天使の身体に取り込まれていくではないか。

美しい精霊は声にならない咆哮を上げ堕天使に襲い掛かった。

「格の違いというのを知らんらしい」

そう言った堕天使は片手を上げ、手のひらを襲い掛かって来る精霊に向けるとグシャリと何かを潰すような動作をした。すると驚くべき出来事が起きた。なんと、堕天使の手の動きに合わせて精霊の身体がグシャリと潰れてしまったではないか！

そして、もっと驚くべくことに天使の腕がぐぐっと伸び、潰された精霊を鷲掴みにすると手を戻し、信じられないほどの大口を空けるとその中に放り込みむしゃむしゃと咀嚼をして飲み込んだ。

「何の足しにもならんな」

「まさか精霊を喰うとは!?」

堕天使の力は人間の手に負える物ではない、圧倒的な力だった。しかし、『帝都の申し子たち』と呼ばれるひとりであるはファウストは果敢にもそれに立ち向かった。
「神への反逆者、ふはははは、おもしろい。おもしろい、このファストを楽しませておくれ」
この帝都には『帝都の申し子たち』と呼ばれる人々が存在する。彼らの力は人間のチカラとは思えない能力を兼ね備えていて、多くの謎が持ち、まるで帝都の為にあるような人々。帝都と共にある、それが『帝都の申し子たち』だ。
ファウストは内に秘めていた力を解放した。閃光が彼の身体からまるでミサイルのように次々と堕天使に向かって蛇のようにうねりながら飛んで行く。
しかし、その攻撃は全て堕天使の身体へと吸い込まれて行く。だがファウストにはそんなことわかっていた。
「まだだ、まだだまだだだっ！！」
大声を張り上げるファウストの身体からナイトの形をした精霊から大蛇の怪物の形をした精霊までありとあらゆる精霊たちが次々と放たれ堕天使に襲い掛かる。
襲い掛かる精霊たちを堕天使は向かい討ち、次々といとも簡単に消滅させて行く。しかし、ファウストの攻撃は無駄ではない、確実に堕天使身体は少しずつ傷付けていっている。
堕天使が怒号の咆哮を上げた。怒りでその全身は紅蓮の業火に包まれ、髪は獅子のように荒立ち、獣のような両眼は紅く変わりファウストを睨み付けていた。

「許さぬぞ下賎な人間風情がっ！！」

怒りで逆上した堕天使は風を切り裂きながら移動し、ファウストを己の爪で切り裂いてやろうと襲い掛かった。

ファウストはすぐさま防護壁を魔法で構築し堕天使の攻撃を待ち構える。がしかし、防護壁はいとも簡単に堕天使に八つ裂きされファウストごと切り裂いた。

防護壁のお陰でだいぶ攻撃を軽減できたが、ファウストの胸は切り裂かれ鮮血が大量に噴出した。彼の受けた傷は重傷だった。

魔力を維持しきれなくなったファウストはゆっくりと地面に着地し、そのままよろけるようにして地面に背中から倒れた。

堕天使がファウスト目掛けて急落下をはじめた。堕天使はこのまま落下しファウストの心臓を爪で突き刺し、抉り取るつもりだった。しかし、爪が心臓に突き刺さる寸前ファウストが呟いた。

「いいのか私を殺しても？」

心臓を突き刺そうとした手は止まり、全身も止まった。そして、姿は絵画から出てきた時と同じように美しい姿に戻っていた。

「どういう意味だ？」

「私はお前の秘密を知っている。お前はあくまで絵画から出て来た偽者であって本物では決してない。言わば張りぼてのようなもの。魔導を使うたびに身体は衰弱し、普通の方法では傷すら癒やすことができない」

「何が言いたいのだ？」
「傷を癒やす為には一度絵の中に戻り、誰かが絵の中に一緒に入り魔導を駆使して絵を修復してもらう必要がある。そう私は聞いた」
「確かにそうだ」
「この世界にはもう私以外にお前を修復してやることのできる奴は存在しない。取引をしよう」
窮地に追いやられたファウストは取引を持ちかけ堕天使の虚を突いた。
「私と取引だと」
「ああ、魂の取引だ。君たちは好きだろう人間との契約が」
古来より悪魔たちは人間との間で数多くの取引をしてきた。悪魔たちはむやみに人間の魂を奪うことはない。願いを叶えるなどという誘惑のもと、人間との間で自由意志によって契約を交わし代償として魂を奪う、決して悪魔は強引な取引はしない、それがスマートな悪魔のやり方だ。
「取引の内容を言え」
「私と賭けで勝負をしよう。私が負けた場合は未来永劫地獄の楔に魂を繋がれ、お前の絵を修復し続けよう。ただし、私が勝った場合は速やかに絵の中へ戻れ、そして、私は再びお前が出てこられないように封印を架ける」
果たして堕天使はファウストの取引に応じるのだろうか？
ややあって堕天使が口を開いた。
「賭けの内容は私が決める」

「いいだろう」
「あそこに男がいるだろう」
後方を振り向き堕天使は、遠くで地面に這いつくばる夏凛を指差して話を続けた
「あの男に一番求めているもの、一番欲しいものの幻影が魅せる。その幻影に手を決して触れてはいけない。触れずに出口を出れば私の負けだ」
賭けの命運を分けるのは夏凛だった。
堕天使はどこからか羊皮紙で作られた契約書を取り出すとファウストに手渡した。ファウストはそれを片手で受け取ると地面に寝転びながら目を通した。
契約書はヘブライ語で記され、契約について細かく書いてあった。その契約書にひと通り目を通したファウストは自分の親指の皮を噛み切り血を出し、契約書にサインした。
ここに悪魔との契約は成立した。
堕天使は契約書を取り上げると口の中に放り込み胃の中に保管し、夏凛の元へと歩み寄った。
「契約の話は聞こえていたか？」
「もちろん」
「ならば話は早い。開かれた黄金の扉が出口だ」
堕天使は夏凛の傍らにしゃがみ込み笑みを浮かべると、夏凛の目を覆い被すように優しく片手を当てた。
視界を閉ざされた夏凛は眠気にも似た感覚に襲われ、そのまま意識を失った――。

どこまでも白く何もない空間。しかし、そこは居心地が良く、心温まる場所だった。
「ここが幻影？」
夏凛はスカートの裾をふわりと巻き上げながら一回転し辺りを見回すと、開かれた黄金の扉があった。あれが出口だ。
「何が出てきても触れてはいけない……」
さっさと外に出てしまおうとした夏凛であったが、出口のすぐ横の空間の中から何かが滲み出すように出てくる。何が出てくるのかと夏凛が目を凝らしていると、それは徐々に人間の姿へとなった。
「兄さま!?」
夏凛の目の前に現れたのは、なぜか上半身裸で両手をいっぱいに広げている時雨だった。
「夏凛愛してるよ、さあボクの胸に飛び込んで追いで」
「兄さまぁ〜」
夏凛は時雨の幻影に駆け寄り、あっさりと抱きしめ押し倒した――。
――夏凛が現実の世界に戻ると彼の目の前には絵画あり、その中に堕天使とファウストの魂だけが入って行くのを見た。
賭けに負けたのだ。
夏凛は直ぐに絵画を壊してしまおうとして大鎌を構え絵画に斬りかかったが、大鎌の刃は絵画との距離を数ミリにして止ま

った。絵画には結界が張られていて手も足もでなかった。
「クソッ、どうなってんだ!?」
戸惑う夏凛の目の前で、信じられないことが起こった。突然、抜け殻であった筈のファウストが動き出し、夏凛を押しのけて呪文の詠唱をはじめたのだ。
ファウストの魂は、まだ、この世界にあったのだ。
事前にファウストの身体の中には人工魂を入れてあった。そして、天使と絵の中に入って行ったのはその魂だった。
そのことに気付いた堕天使は狂気の形相でファウストを殺そうと絵画から出ようとしたが、それはあと一歩の所で失敗した。ファウストの術が完成したのだ。
絵画に封印を架け終えたファウストは、それが最後の力だったらしく地面に背中からバタンと倒れ気を失った。
「やっと仕事終わったぁ〜、でもこれからもう一つの仕事だよぉ〜っ！！」
夏凛もまた、そう叫ぶと地面に背中からバタンと倒れて気を失った。
天高く輝く太陽の光は、静かな寝息を立てる夏凛をいつまでも優しく照らしていた——。

絵画はその後、帝都政府の管理の下に帝都のどこかに厳重に保管されているという。
保管されている絵画には凄い形相をした天使が描かれ、その絵からは何かを握り締めようとする右手だけが外の世界に出て

いるというが、これはあくまで噂であり、真実とどうかまでは定かではない――。